

三言詩集
卷之十

Blank page with blue binding strip on the right edge.

萬延元年七月新鑄

常陸誌料

郡鄉考二冊

三香社藏梓

明治三年
七月十一日
購



常陸誌料前編八種

目錄

常陸國郡鄉考 十二卷 二冊

常陸長曆 全 一冊

鹿島長曆 全 一冊

關城繹史 全 一冊

平氏譜 七卷 二冊

前佐竹氏譜 後佐竹氏譜 上中下 三冊

小田氏譜 上下卷 二冊

門凡呂
號 101
卷 1

常陸志斗

三香社藏

諸族譜

十八家 二冊

常陸誌料後編三種

目錄

常陸國新舊村名考 二冊

侯伯譜 二冊

逸事 二冊

前後編合廿冊

目錄終

常陸國郡郷考題言三則

一斯書ハ風土記の全文を郡郷小配して悉く載せ其山川地名等ハ皆今地小驗して是と考え和名鈔郷名神名帳の官社兵部式の驛家國史贈位小神及庄保私稱小郡歌枕の名所等まで遍く古今の諸書及古文書等に據る其考と著とり其餘每村小田額村名乃變遷等ハ後編志料小譲りて此小畧次

一本國郡境文祿慶長檢地の時より變遷甚多く古新治郡ハ極西小在て毛野川北東より北小長く那珂郡と界を郡なりと今ハ其毛野川北東より地中世關郡伊佐郡小栗保と稱せし處皆真壁郡小入り北地

ハ中世中郡笠間郡と稱せし處茨城郡小入里にて古に疆土ハ寸地も存せし別小

古茨城筑波河内三郡の地を割て新治郡と置き其郡中荒張と云

ふ所と新治村と云え改めれも考古の為小迷惑と云其餘十郡も

亦皆沿革少なきに今斯書ハ風土記の四至和名鈔の郷名と本

と諸書小徴して古時の疆界考たれも其謬も亦多し

一覽して其地勢と辨るる地圖は便なる小若くハ因て今

小圖と製して卷首小掲し郡郷神社山川等在處方位と示し斯

書と讀ん小ハ本編の考証と檢して此圖を參見とハ其土疆の迷

ちるは但紙小幅員を各地遠近廣狹を精しくする能は

其細密なる事ハ別に新製の大圖あり合を見よ

一余固より假名つひて小をハの學小昧者れも其誤も多くして

看ん人のよきまづ難き所もあらざるを冀ハ大方のゆるし給

ひ給

安政六年己未正月

水戸

官本元球仲笏識

識

安政六年己未正月

水戸

官本元球仲笏識

識

安政六年己未正月

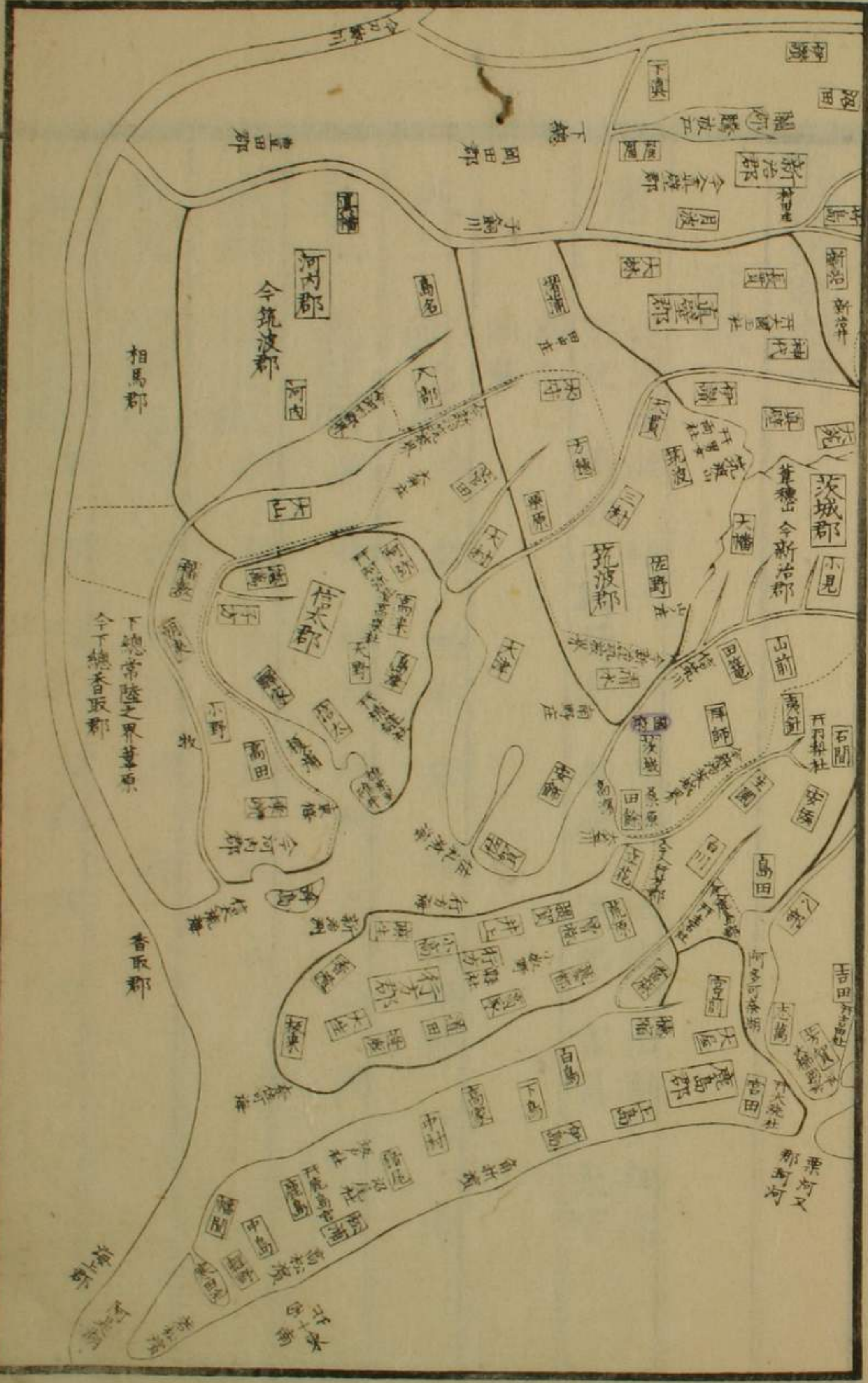
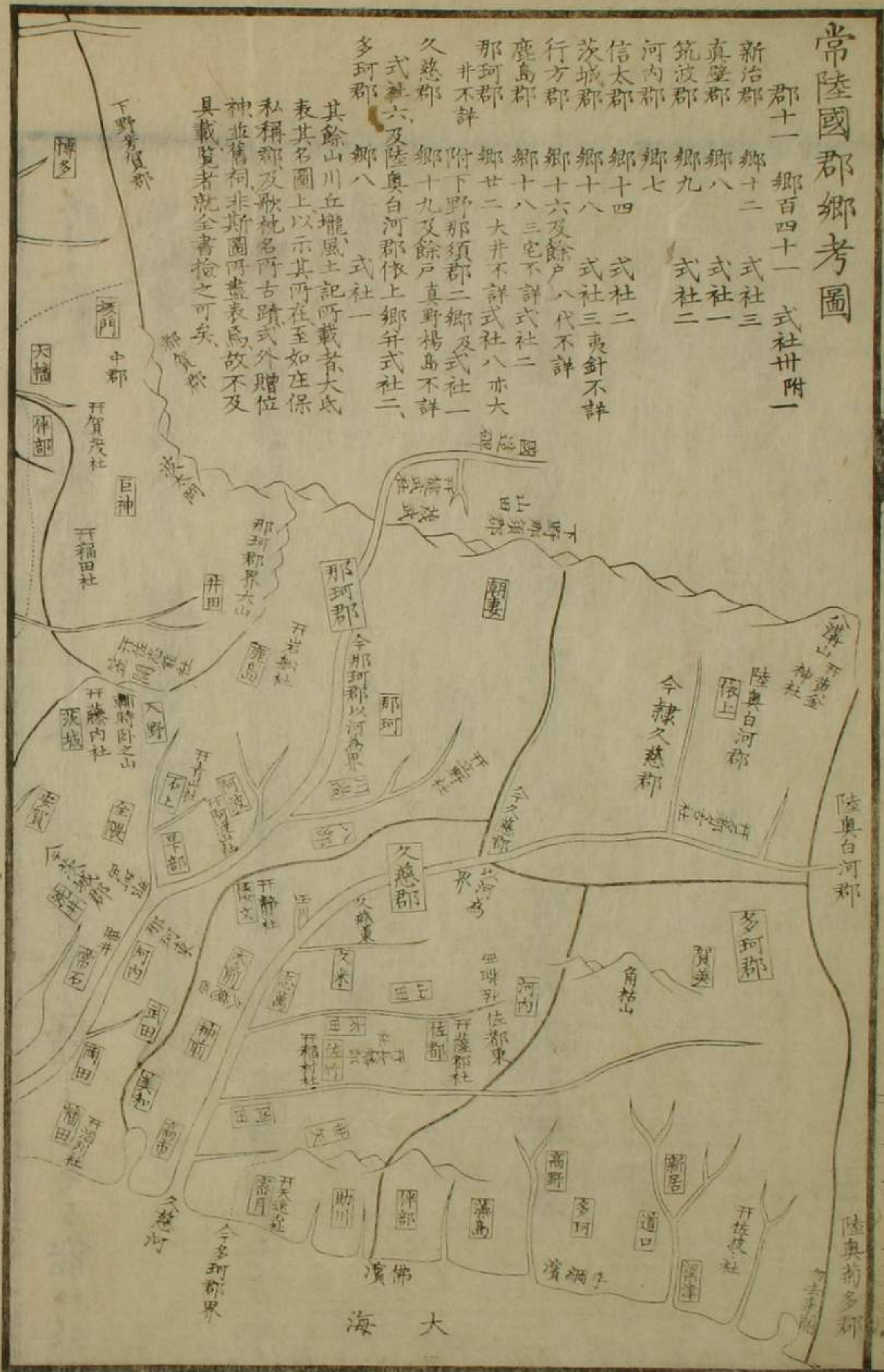
水戸

官本元球仲笏識

常陸國郡鄉考圖

郡十一 鄉百四十一 式社卅附一

新治郡 鄉十二 式社三
 真壁郡 鄉八 式社一
 筑波郡 鄉九 式社二
 河內郡 鄉七
 信太郡 鄉十四 式社二
 茨城郡 鄉十八 式社三
 行方郡 鄉十六及餘戶八代不詳
 鹿島郡 鄉十八三宅不詳式社二
 那珂郡 鄉廿二大井不詳式社八亦大
 井不詳
 附下野那須郡二鄉及式社一
 久慈郡 鄉十九及餘戶真野揚島不詳
 式社六及陸奥白河郡依上鄉并式社二
 多珂郡 鄉八 式社一
 其餘山川丘壠風土記所載者大氏
 表其名圖上以示其所在至如在保
 私稱郡及歌枕名所古蹟式外贈位
 神並舊祠非斯圖所盡表為故不及
 具載覽者就全書檢之可矣



卷七 茨城郡 郡郷 神社 神祠 庄 河

卷八 行方郡 郡郷 神祠 庄 海

卷九 鹿島郡 郡郷 神社 古祠

卷十 那珂郡 郡郷 神社 庄 保私稱郡私稱郷 河

卷十一 久慈郡 郡郷 神社 庄 河 及今隸本郡陸奥白河郡

卷十二 多珂郡 郡郷 神社 山 關

附錄 式外贈位神祠二

常陸國郡郷考目錄終

常陸國郡郷考卷一

建國原始

水戸

宮本元球仲笏 著

風土記云常陸國司解、由古老相傳舊聞事、問國郡舊事、古老荅曰、

古者自相模國足柄岳坂以東諸縣、惣稱我姫國、按我姫々紀吾妻吾婦小作古事記景行卷

云故號其國謂阿豆麻也上野吾妻郡和名鈔音阿加豆末又按發端の一行ハ續紀和銅六年五月の官符ニ從ひくの文ニて建國此事不

ハ要ふあれと先此書を風土記を根據と一其文を各郡郷の下に移して解せよ小專善本の文小從ひて原文の面目と失ハさる欲す

故小らも原本此書を載て下文郡郷の下に割移せるハ 是當時不

言常陸唯稱新治筑波茨城那賀久慈多珂國各遣造別令檢校其後至

難波長柄豊前大宮臨軒天皇孝德之世遣高向臣中臣幡織田連等惣領

自坂以東之國按高向臣織田連、後小大夫、作姓氏錄高向朝臣、武内宿祢六世孫猪子臣之後也、織田姓ハ詳ナラズ武

越前敦賀郡織田神社ある、其地名る、惣領々持統紀、于時我

伊豫惣領續紀文武四年竺志惣領周防惣領吉備惣領等あり

姫之道、今為八國常陸國居其一矣按崇神紀十年武瀧川別遣東海と古事記遣東方十二道、不作其景

行卷に東東方十二道あり、蓋東海道之地を、孝徳紀二年東方八

道とある、即此八國、小と相模武藏上下總上下毛野常陸陸奥とい

ふ安房伊豆の後、所以然號者、往來道路、不隔江海之津濟、郡郷境、相

續山河之峰谷、取近通之義、以為名號焉按建國の始より國名の義、此文不盡、古事記續紀

常陸を常道、小作萬葉常土に作る常、或曰倭武天皇巡狩東夷之國、

幸過新治之縣、乃遣國造毗那良珠命、新令掘井、流泉淨澄、尤有好愛、時

停乘輿、翫水洗手、御衣之袖、垂泉而沾、便依漬袖之義、以為此國之名、風

俗諺曰、筑波岳黑雲挂、衣袖漬國是也按是又國名の一説也、新治菟久波の歌、景行四十年、此紀、これ

ハ其同時とある、小やこれと新治郡條、小毗奈良珠命と崇神の時

と、國造本紀にハ比奈羅布命と作、成務定賜國造と云、風俗諺と

あり下大、方枕詞なり

土壤沃壻

風土記云、夫常陸國者、埤是廣大地、亦緬邈、土壤沃壻、原野肥衍、墾發之

處、山海之利、人人自得、家家足饒、設有身勞耕耘、力竭紡蠶者、立即可取

富豐、自然應免貧窮、况復求鹽魚味、左山右海、植桑種麻、後野前原、所謂

水陸之府、藏物產之膏腴、古人曰、常世之國、蓋疑此地、但以所有水田、上

少中多年、遇霖雨、即聞苗子不登之難、歲逢亢陽、唯見穀實豐稔之歡、歟

原云不略之。按和名鈔每郡の郷數他國不校するに多き淺見まら
 當時戸口の繁昌思ふべし。本文虚言ふべし。あらはれず。上田少きハ
 膏腴もてハあらざる。今田園薄瘠多く原野の廣莫開墾堪ハ
 以古を元陽に有年あり。西南水流は傍なる地の事なる。雨
 暘適宜あり。豊熟する
 今他國に異ならん

境土

和名鈔常陸

北太國 國府在茨城郡行程上三十日、下十五日、
 按行程主計式同、朝集使京師往復の限也

管十一

郡 按民部式同又
 大遠とす

新治 甬上波里。按
 十二郷上郡也

真壁 萬加倍。按
 七郷下郡也

筑波

豆久波。按
 九郷中郡也

河内 甲知。按七
 郷下郡也

信太 志太。按十
 四郷上郡也

茨城 牟波良
 岐。按

十八郷、
 大郡也

行方 奈女加多。按十六
 郷及餘戸大郡也

鹿嶋 加之末。按十
 八郷大郡也

那珂 按

二郷大郡也、蓋
 郷數誤あり

久慈 按十九郷及
 餘戸大郡也

多珂 按八郷
 中郡也

按戸令云、凡郡以廿里以下、十六里以上為大郡、十二里以上為上郡、
 八里以上為中郡、四里以上為下郡、二里以上為小郡、この里ハ郷を
 いふ出雲風土記ハ神龜元年改里為郷と云はる。是ハ古ハ郡郷
 の大小を稱する地の廣狹と論を凡戸口此多少淺以て大小とせ
 一之本國總計
 百五十餘郷也

田額

和名鈔云、田四萬九十二町六段百十二步

按孝徳紀田租の法ハ凡田
 長三十步廣十二步為段、十

段為町、段租稻二束二把とあり、一束ハ十把の事、今義解に各段
 地獲稻五十束、束稻春得米五升也、即於町者須得五百束也とあり
 と是ハ不て算をれハ全國一歲收穫の稻米より租稻の數をり、知
 るべし、されハ租法ハ續紀慶雲五年ハ一町より廿二束と改り、十
 五束をあり、一事を令集解不其年と界と、今前令後と、今分ち
 説書もそれも畢竟外の大小異なる、實數に至りてハ前後
 ともハ大異なる、小なり、云ハ度量の學ハ昧なきハ前後の數
 と并舉と考不備不

獲稻貳陌萬肆阡陸陌參拾壹束五把五五 此米陌萬貳阡參陌拾

五石漆斗漆外漆合漆夕 此一年の作高也

令前田租捌拾捌萬貳阡參拾漆束捌把捌捌 此米肆萬肆阡壹石

捌斗玖升肆合貳夕 此田租の納高也

令後田租陸拾萬壹阡參陌捌拾玖束肆把陸陸 此米參萬陸拾玖

石肆斗漆升參合參夕貳 此米同前

右の外田額の異同伐載するを諸書より檢出するを左小列し參考

小備ふ。拾林鈔云、田四萬二千卅八町、伊呂波字類鈔、新撰類聚往

來國華萬葉集等こまき。從ふ。掌中曆云、田四萬九千九百十二町

○海東諸國記云、田四萬九千九百六段。以上三書異同あるを今

考ふに由なるは、何きも和名鈔より其數多しを見たり。田

の壑關ありて額の増する事、知らざりたるに。集古圖所收

下鴨社輿地圖云、田壹萬二千卅八町、運歩色葉集、節用集等これ

從ふ此數上諸書より餘りに減少するを此圖の年代ハ詳あら

されど、本國小傳ふる弘安の作田勘文嘉元の田文、亦類

國衙所管の公田をのみ載するは、勘文ハ殘闕して

全數知るをうらむに、田文ハ九千三十六町七段あり。諸國高附云

高五十三萬二千百石、此書天文十二年、日本國中知行高寄高木光

資上野晴時二人、諸國帳請取之と記する。足利義晴將軍の有司不

や俗に天文繩と稱するは、類ふるを。天正記云、高五十三萬石

太田和泉守記とあり。豊臣家檢地帳の目錄より、寛永日本得名、當

代記等も此高く。○文祿三年、豊臣大閤檢地帳云、高五十三萬八石

按上る大數是ハ全數なる。古今城主記、正宗寺所藏慶長九年

繩入帳も此高不同。是時より一段ハ三百歩減せしむ。高

出舉

按米穀を貸出し、利米を取ると云ふ

和名鈔云正

按正稅の公廩

各五十萬束

雜稻七十九萬六千束

本稻百七十九萬六千束

按正稅と朝廷へ上る田租の名廩ハ、說文公廩也、字彙官舎とあり。國廳の事之

正税出舉を其利と共に全く朝廷へ納め、公用の不足を補ひ公
 廩出舉を其利をて所管の負欠未納を補ひ且朝集使還國の路糧
 其餘國中の要なる事不使用しと殘りある廳官の配分とるを
 交替式不詳之且其内に天平十七年始置公廩といふ事も見え
 聖武の弊政より起り事々續紀天平六年正月に聽諸國司每
 年貸官稻大國十四萬以下上國十二萬以下中國十萬以下下國八
 萬以下如過此數依法科罪又十七年小諸國公廩大國四十萬束上
 國三十萬束中國二十萬束下國十萬束ともあり是正公とも此
 朝より始まりた事なり本國を大國なり本文の數廿萬束を
 多くするハ後小増加と見ゆ原雜本の位を例置とる故小人
 往々不其解と惑ふ本稻ハ正公雜三件の貸出し本より其數ふ
 生ハ今これと訂正せり下の主税式と校しと其然る代知事

主税式云正税公廩各五十萬束 國分寺料六萬束

四萬束以入僧居二寺各二萬束每年出舉以其息利永支造寺用と
 あり其始より是又二萬束を多く僧居二寺ハ國分寺國分寺
 の二ツなく税所氏所藏嘉吉二年正月留守所下文云正月八日吉
 祥御願請僧御布施伍阡玖百二十四束事三寶御布施三百束講讀

按續紀天平十六年詔諸國割王稅

師并請僧御布施伍阡陸佰二十四束右依太政官天平神護二年五
 月十七日延曆四年三月廿日兩度符旨奉上所如件とあり此項

正税と用ひし事主税式あり **大安寺藥師寺料各五萬束 文**

殊會料二千束 藥分料 按典藥寮一納 **交易料四十二萬束** 按何

交易の料ふや此目唯本國より **大學寮料五萬四千束** 按大學寮

陸稱稻五萬四千束近江越中備前伊豫等國各一萬束預國司出舉

以其息利春米并交易輕物每年附貢調使送納充於寮家雜用と此

と主税式備前の下は一萬一千束とあり一千束行文なり此

式にうく載る幾程もかく廢格とあり三善清行意見封事

第四條云請加給大學生徒食料事又有令常陸國每年出舉稻九萬

四千束以其利稻充寮中雜用又舉丹後國稻八百束充寮中雜用學

生口味料年代漸久事皆關違と見ゆ封事九萬四千束を以て全

本國の出舉とる記臆の誤之又云望請常陸丹後兩國出舉本

額九萬四千八百束之利稻二萬八千四百束之代遍以諸國田租

充給學生等食とま又主税式は檢り九丹後國稻八百束預

國司出舉以其息利交易味物送寮充學生等米料との小是出舉の息利ハ今半倍とあれと餘小高利ふきハや養老四年三月六年閏四月天平勝寶五年九月等小出舉十束取利三束と何り延曆十四年とも同一令と下大同元年又半倍復と一々竟小弘仁元年九月小至と諸國出舉官稻率十束取利三束とを定まると故小今封事の息を三之一の數に此封事の事行つたたるやいふ

修理池溝料四萬束 救急料六萬束 按續紀延曆八年四月美濃尾張參河三國年飢開

庫准賤價糶米以其價至秋置額名曰救急とある 停囚料十萬束

按三韓の歸化蝦夷の俘虜と安置廩給とを料あり此國分寺料以下九件ハ即和名鈔の雜稻とて式ハ總計百八十四萬六千束あり拾芥鈔も此數小從不和名鈔を校せば五萬束多くとり此百八十四萬束を米とて九萬二千三百石なり此に半倍の息代出とハ四萬六千五百五十石あり本子惣計十三萬八千四百五十石とあり田租ハ上小下如く一町より一石一斗と出すに此出舉ハ田租より三倍餘とて田額小配當して貧富とも不出すにしても田一町より租稻とてハ四石三斗之況也借貸ハ中民已

下の事ふきハ歳々の返辨小官吏の煩擾民産の儲蓄ふたも亦推知るへ故小朝廷もこれを憂ひ貞觀四年畿内の出舉を罷百姓の堪否を試さやうと天下小及さんと為給ひと其計行ハ難くして元慶四年又舊復出舉と事三代實録小見えたり四海困窮也當世の様想ふへ一収此本稻和名鈔と米を五萬束多に故と考ふる類聚三代格弘仁二年二月太政官符小應出舉郡發稻五萬束事とある此五萬束もて其文小右得常陸國解儀此國去京師行程遙遠貢調脚夫路糧乏絶仍故守從四位上石川朝臣麻呂以去靈龜中始置件稻每年出舉以利充糧其用度者附帳言上而去大同四年主稅寮勘出不被官符輒以出舉望請依舊出舉擬濟飢乏謹請定裁者右大臣宣奉勅依請こま此出舉靈龜中よりハ十餘年已小置たまきとて官符と被らさる故公小計帳載さると以て和名鈔と著と時其數小及ハたりと式に郡發の目録ハ他國も其名ふ故小交易料救急料との内に加えと載るる此本稻の數式と鈔との異同も和名鈔ハ弘仁二年以前の成書とて知ま且後紀弘仁二年正月丙午於陸奥置和我菟羅斯波三郡とあり三郡とも和名鈔小載され其成書弘仁二年以前小あり事疑ひふ或云陸奥郡名ハ民政部式も此三

郡をけきハ此三郡ハ蝦夷の地より弘仁二年以後又廢事
見其郡と載るハ以て年代の証とハ難し是を
深く考へざるの論なり蝦夷ハ亂陸奥に於て延曆の末坂上田
村麻呂膽澤斯波の二城と築て止る賊地悉く版籍不入
成以て置る三郡ハ何の時ふり又廢せんや陸奥ハ賊其後
不至りて安倍頼時らよみ出羽ハ元慶より蝦夷の亂
と異之且民部式ハ三郡を載るハ後人傳寫ハ脱誤なり其
故ハ神名帳ハ斯波郡あり是破綻と露ハせり式ハ久年の傳
寫小く地名の類誤多し兵部式驛傳馬
此條を特小訛繆あり考訂ハ難し

調庸

按唐書食貨志云租庸調之法以丁為本又云陸贄疏曰
有田則有租有家則有調有身則有庸是調庸之法の據也

主計式常陸國

調緋帛七十疋

緋纈純三十疋

按今本國與郡紅藍と産す此調特本

國のこなるハ古より産すと見ゆ

紺帛七十疋

黄帛一百六十疋

純一千五

百廿五疋

長幡部純七疋

按風土記久慈郡の出は所

倭文三十端

按上

自

餘輸純暴布

按暴布ハ風土記那珂郡の出を所之賦役令云凡調繪
純絲綿布並隨郷土所出正丁一人絹純八尺五寸六丁

成疋長五丈一尺廣二尺二寸布二丈六尺二丁成端端長五丈二尺
廣二尺四寸これ疋端ハ布帛小て其稱と異ふ其長ハ大異なり

今世の布帛二端より一疋とする小同トらず

庸輸布

按賦役令云凡正丁歳役十日若須收庸者一日二尺六寸須
留使者滿三十日租調共免役日少者計見役日推免通正役

並不得過四十日次丁二人同一正丁中男在京畿内不在收庸之例
裁解謂次丁一人歳役五日若收庸布一丈三尺是為一常其留役十

五日者租調俱免也折免とる其使ひたる日數ハけを庸と收めぬ
代いふ正丁ハ廿より六十まで中男ハ十六より廿まで次丁ハ六

十一より十六以上とる者といふ庸かこ是庸ハ其歳小よりて役
日小多少あれを預め總數と定むるなり

中男作物 麻四百斤 苧紙 熟麻 白暴熟麻 紅花 茜麻

子 腊 鯨 按戸令云十六以下為小、廿以下為中、作物ハ手作の物ハ
 今調副物小同、其義解不謂此唯為正丁不及次丁中男也、此品賦役
 とも式の時ハ其製改まると式此外駿河下野等十一國と共小
 産絲の貢代載るも伊賀伊勢等も貢夏絲と調の内とて上中
 産三品の絲代貢を係諸國を調の内と為さる命ある時のみ納
 る品小此三等の定めあるも毎歲輸納を承小
 をあらさる故に調の内小入さる承なる也

按上の調帛布端疋の數と以て其丁數と算を正丁一萬一千
 人餘なり是當時本國歲々増減あり正丁の數もて自餘輸絶暴布
 とちる分ハ時ハ増減あり其數定まりふま之
 一郡百三十六郷
 及餘戸二奈きハ一郷五十戸代
 算すきる戸數六千八百餘戸之

雜藥

典藥寮式諸國進年料雜藥 常陸國廿五種 青木香卅斤

呼馬兜鈴根為青木香啓蒙云後世方書及和方中二青木香ト云ハ
 馬兜鈴根ナリ和名ムマノス、和名鈔香藥部俗云象目と同名牟
 麻乃須須なまとも同 桔梗六十斤 按本草和名和名鈔並阿里乃
 品尔らざるに似たり 比布木本草和名又乎加止々

岐 芎藭 按本草和名於无奈加都良又佐和名鈔 大戟各七斤
 和名本草云於无奈加豆良又弓窮二音 比布木本草和名又乎加止々
 按本草和名波也此止久佐和名鈔波夜比止久佐小 前胡 按本草
 握ハハマハハヤの誤今名たりとひと呼ふ 和名宇

多奈一名 枸杞各十四斤 按本草和名奴美又須祿和
 ノゼリ 名鈔沼美又須利俗音久古 獨活二斤
 按本草和名和名鈔並 地街五斤 按本草和名都未女康賴鑿心
 豆知多良一云宇止 方宇都未女啓蒙オトコヒイナ

白朮廿斤四兩 按本草和名和 藍漆七斤 按詳から本國の外廿
 名鈔並平介良 二國の進物なき奇品
 小々あらさ 龍膽五斤 按本草和名鈔並夜美又
 似たり 佐一名途加奈啓蒙云リンドウ 杜仲八

斤 按本草和名和名

白芷五斤

按和名鈔與呂比久佐一云加佐毛和本草和名又佐波宇止盤心方佐

波曹良之啓

白頭公一斤

按本草和名和名鈔並於木奈久佐 茨 蒙ヤマウト 一云奈加久佐啓蒙ヲ千コハナ

本名加波佐久

甘草廿五斤十三兩

按本草和名阿未岐出陸奧國云夜未世里宇萬世里

國の外陸奥十斤出羽五斤

甘藷四斤

按本草和名也波良久佐一名加波良佐々介和名鈔夜波良久佐

末都奈岐和名

干地黄一斗三升

薯蕷二升

狼牙一斤九兩

按本草和名和名鈔並夜萬都以毛俗云

山乃

麥門冬六斤

桃仁二斗三升

附子一斛

按本草和名

以毛

蛇床子

按本草和名比留无之呂一名波未世利和名

名於宇啓蒙

トリカブト

鈔比流年之呂啓蒙ハマニンジン海邊ノ砂

土ニ生ス

右依前件附貢調使送察檢収訖即與返抄

按式上文小凡諸國醫師公解人別

所給十分之一、毎年割留隨國所出交易輕物附貢調使送之若未進移主計察令拘使返抄とあれハ其藥の産する國々にて醫師の配分を公麻の十分一を此買上とせし其餘ハ藥分料と用る事と見えたり返抄ハ請取書と云ふ又此外小民部式諸國貢藪番次何れ本國ハ寅申年比第二番々々々蘇酥同翻譯名義集牛乳とく作まる事淺載す政事要略本草和名等小も其解を出せり

馬牧

兵部式諸國馬牛牧

常陸國信太牧

按信太郡小野の牧之説其郡比下小あり

馬五六歳

每年進左右馬寮各備刷剉

按字書刷剉淨也剉斫也馬の毛蹄淺はくをひきと

器仗

按器ハ甲を云ふ仗ハ横刀以下浅ワ

常陸志斗

馬牧

器仗

驛傳馬

九

三香土

成

同上諸國器仗 常陸國 甲六領 横刀廿口 弓六十張 征箭六

十具 胡藤六十具 按甲より胡藤より代造るの料ハ主税式ハ見

一隻とあまきる三千隻より一具ハ五十隻と云ふ 右毎年所造具依前件其様仗者 按見ゼ本

色別一箇附朝集使進之

驛傳馬

同上諸國驛傳馬 常陸國驛馬 榛谷五疋 按信太郡 安侯二疋 按茨城郡

曾補五疋 按行方郡 河内 按那珂郡 田後 按多珂郡 山田 雄薩 按並久慈郡

按驛路の次第ハ先下總於賦驛 按於賦々相馬郡大井村 本國河

内郡不入 按河内郡の傳馬あり且行程の使に就て云ふ 信太郡稻敷 按今八代村人説其郡小在 朝

夷 按根本村地名代遺 二郷と歴て榎浦の上流代渡 榛谷驛小至る 按今羽賀

國界 此驛より三里半 按大井より國界より一里半なり 榛谷 曾補驛

小至る十四里 按行方郡手賀村小地名存せり 厩牧 令云九諸道須置驛者每卅里置一驛若地勢阻險及無水草處隨便

安置不限里數 これ驛代置と定法をたて今五里程より一驛を建屋事なるところ隔遠あるハ其間必一驛と脱する

兵部式諸國の驛誤脱少からず或云茨城郡茨城郷國府ありて榛谷より九里平坦の路なきを式不載さる一驛を國府より一驛と

脱する ハハ 國府より曾補より今五里に恰好の路ありとゆきと兵部式美濃不破郡不破上野群馬郡群馬の類を皆國

府の地ふ保の驛馬の條に出るを見るを獨本國のみ茨城の名代載さるを理を傳説小昔を信太郡と茨城郡とを問ふる流海

とより官道なりと云えるに付と思ふ信太郡島津郷の對岸を茨城郡大津郷より島津大津とも舟船の集れる地名ふれ

を此二郷の内何より驛家なるらうり且島津の屬村ふる處を大山村小驛長々宅趾と覺て長者屋敷もあり又

國府ありし傳説なる古の官道を府中の地より南より三村の方より中津川より、ついでなごもつふに因り思ふは是又大津の方より此便路なり、厩牧令小凡水驛不配馬處量閑繁驛別置船四隻とありし兵部式も其地を船敷をも載ふれともそまは全く水驛舟行の地と見え、此地ハ榛谷より陸路三里嶋津小至り舟より半里ハ流海渡り大津小達をゆる大津より陸路曾祢小至る多十里餘あり、船と馬と兼ふきハ往復をうらば小風土記も不隔江海之津濟とありし陸地連續の故ハ國名ともたゞし由なるに陸路少の迂回ありとも津濟不就けり云ハんをいへ、況傳説に付て思ひよるのこに、其徴ありに毛、あつた但驛長茂長者と稱し古驛小、曾祢より安侯驛小至る必長者屋敷あり事ハ信太郡詳不載す

八里 按今安古村 安侯より河内驛小至る三里 按上中河内村 河内より山程ハ

雄薩驛小至る四里 按今大里村中世小里 雄薩より山田小至る二里半 按山田今

山田より陸奥白河郡高野驛小至る十二里 按國

松平村其名存り説久慈郡小詳あり

界徳田村より八里徳田より高野より四里高野を今棚倉之

河内より瀕海ハ田後驛小至る九里 按今田尻村 田後より蓋陸奥長有驛小達す 按長有を其地詳ならは田後より國界勿來關まで七里 是弘仁三年 後紀 以来の驛路なり 按本國ハ平坦の地多き故小や太氏廿里一驛の制ありハ 又按風土記不載なる驛を榎浦 式榛谷同地 曾禰 式板來和名 板來 式無和名

河内 式並 助川藻嶋平津 式無 巨神 仙覺萬葉鈔所引風土記和名抄小々郷名之式無

八所あり其廢置たりし事ハ後紀弘仁三年十月廢常陸國安侯河内助川藻嶋棚橋六驛、更建小田雄薩田後等三驛 按弘仁元年文室綿麻呂陸奥出羽

按察使となりし二年三月ハ薩體幣伊二村の蝦夷伐征より小因り其四月ハ機急と告る為小陸奥ハ内ニ於り海道十驛と廢し更に本國不通する道より長有高野二驛を置り此廢より十驛を續紀養老元年小岩城國と置たる時其國中不建する驛は其國と廢

一と云々要なき故之叔其警小付と又今年本國の驛不及つとされ
 と上りて舉ぐ如く安侯河内の二驛を廢し其まに代る地と置
 け家何如ある故小の後其緊要なき成以て復き一事ハ兵部式
 みて知られしと助川藻島を風土記不出たり棚橋或棚嶋は作る
 其地詳なきは和名鈔久慈郡楊島あり字形稍似し是ハ同地と
 なるや楊島亦詳ならは或云其郡折橋と云ふ地は棚橋と折
 橋と書たふより後折小訛ると訓ともを改るゝとあるし小
 田を式及び風土記は據る山田に誤り然るに近年式考異小式
 成以て誤るとしち却て非ある猶久慈郡小詳は辨せり助川藻島
 と廢して二驛の間なる田後の一驛とせしは煩と省けぬ事知る
 處
六年十二月廢常陸國板來驛 按板來驛を曾稱らる鹿島小赴け
 し式小曾稱ハ他驛と異なり小路の常數馬五疋と置
 きたる此驛代廢と故小其用とも兼たるを平津巨神
 の廢せし史小漏たると以て其年代知る由ふ

同上傳馬 河内郡五疋 按令の制と殊ふく式に至ると諸國

と云に傳馬は數減くと本國も唯一郡小存とるのこ 按厩牧令
 郡各五然る小河内郡のみなる驛馬の國司量置不必須足小准
 とし公式令給驛傳馬皆依鈴傳符尅數と驛鈴と傳符とのた
 り付は數と郡驛より馬代出ると親王及一位已下初位小至る
 まる馬數の等差と舉たり厩牧令小凡公使須乘驛及傳馬者若不
 足者即以私馬充又凡官人乘傳馬出使者公式令小凡在京諸司
 有事須乘驛馬者皆本司申太政官奏給義解謂神祇官依幣帛宮内
 省依御贄乘驛之類是也又謂國司向任及罪人分乘官馬者乘傳馬
 之類後紀弘仁三年五月小伊勢國言傳馬之設唯送新任之司自外
 無所乘用延喜雜式小凡國司不乘驛馬但正稅大帳朝集等使乘驛
 馬國司新向國乘傳馬なると見と傳馬の用を甚校るれ其
 數の減と由と驛馬と用法は異なるは成知るは續紀天平寶
 字元年五月勅曰頃者上下諸使惣附驛家於理不穩亦苦驛子自今
 已後宜為依令これを驛馬の便不就
 と者多しは成禁制とらるる

健兒

健兒 軍團 土

同上諸國健兒

常陸國二百人

按健兒を皇極紀天智紀等不始に見えたきと唐人の詩に多く用ひたる

小同く兵士の美稱多くふり其職名と名れり其續紀天平六年四月免諸道健兒諸士選士田租并雜徭之半とあれは是ら先小此職を建たれり同十年五月傳東海東山山陰山陽西海等道諸國健兒同十一年六月緣停兵士國府兵庫點白丁作番守之同十八年十二月京畿内及諸國兵士依舊點差これら兵士健兒互稱をれり續後紀承和十年小々健士と稱しと鎮兵と別ら請射下健士准兵士下兵同令修理城隍許之とをちる兵士ハ鎮兵の事ふる鎮兵ハ軍團小屬より射下ハ麾下の類の稱之續紀天平寶字六年文德實錄天安元年三代格貞觀四年等此文小據ハ其職務ハ固關又ハ貴使の送迎及上の守兵庫の類と見えたる陸奥出羽の二國の之をあれと鎮兵健兒此二項成並舉たるを陸奥出羽の二國の之を附 軍團ハ唐書兵志ハ府兵之制起自西魏後周而備於隋唐因之と云ひ又諸府總曰折衝府凡天下十道置府六百三十四皆有名號而關内二百六十有一皆以隸諸衛凡府三等兵千二百人為上千人為中八百人為下府置折衝都尉一人左右果毅都尉各一人長史兵曹別將各一人校尉六人士以三百人為團團有校尉五十人

為隊隊有正十人為火火有長とあふるを斟酌しと立たる制もて義解小團者聚也と注せり大小毅の名ハ果毅都尉小取主帳々長史に依きて職員令小々官員の大率成舉け軍防令ハ其部下兵士の數あり義解も各其國の大小より兵卒小多少ある淺知る一此制天下小行ハ事ハ載れり邊要の外毎國必有之と思ハ持す持本國をハ史籍に其跡絶る所見か一三代格延曆十四年五月太政官符小應以衛府舍人任主政主帳事右被右大臣宣奉勅衛府舍人係望軍毅今廢兵士其望已絶若右巧於書算者宜用主政主帳とあるに據る此項已小諸國の軍團と廢之故小軍毅小ふらんと望め人々を郡の主政主帳小用る云ふ其後大同元年十月格小陸奥出羽日本紀略弘仁四年三月小太宰府政事要略弘仁五年正月小陸奥出羽續後紀承和十年四月小陸奥又嘉祥元年五月も陸奥三代實錄元慶三年六月小出羽又同年十二月小佐渡元慶五年三月小出羽元慶六年九月小鎮守府等を皆たに軍團の事あれハ太宰府與出羽佐渡ハ廢せり軍毅主帳廿五人糧米准太宰府統領以正稅給之民部式凡佐渡國雜太團給軍毅一人職田二丁主帳一丁なり見えり式の項も

常陸志 卷一 官員

此三國を現存を其餘三代格貞觀十一年三月は隱岐十一月小長門十二年五月小出雲七月は因幡十七年十一月小石見元慶二年二月小壹岐對馬伯耆隱岐因幡出雲長門四年八月小越後寬平六年八月小能登七年七月小越後十一月は伊豫十二月に越中等の國弩師の事あり弩師を軍團小屬を依りて此諸國を此項までを軍團たりしふ多し一寛平六年より式茂撰ひきふる延長五年より僅廿六年なれは此諸國の内は猶軍團の存きもあらん小式は三國の外絶る其事ふと軍防令義解ひ文と兵部式小載たるをふんばはらぬちせり又朝野羣載在廳下司五職の一は健兒所あるを健兒部領する職と見ゆ本國は健兒所を百濟姓平岡氏より治承の頃より相傳て天正の末まで其家存り系圖文書等今傳はれり

官員

按開闢の始より國造の制あり一時此事は每郡小舉たきハ參見せしむる不舉る孝徳二年改新詔以後の制と知る

職員令 大國 守一人 職掌ハ原書茂見るハ一已下 介一人 同上 給事

大掾一人 同上給事 少掾一人 同上給事 大目一人 同上給事

同上給事 少目一人 同上給事 力亦數 史生三人 同上給事 博士 博

士一人 同上給事 醫師一人 同上給事 學生五十人 醫士十人

按是國府の吏員不と總計七十一人其事力以給する五十人小近一是を上戸より年々不出しと官員の家は事え奴僕此用は供する者之本國ハ承平小大掾平貞盛大功たりしより其職を子孫小傳え且其項より國司の在任不けきを權柄大掾氏より治承元以後支族馬場氏其職を襲るも猶勢威ありされと總社元應元年十月文書小掾官八人中座五人書生十人一分五人御子八人國掌仕領姓名國雜色二人國舍人四人廳供僧五人總社供僧最勝經衆最勝講衆等十一人合五十餘人連署あり此項の大掾ハ時幹小て即掾官の内小署をり盛時と其様をりたるを見るハ一掾官とて八人ハいさ中座ハ座次より此稱と見ゆ廳供僧ハ平日何口ふる務ありしや最勝の二項を國分寺の僧衆之書生を本文の學生小業茂博士不受多平日其師と助る務あり是茂又公文との小天應二年格証とく一分ハ詳ふらに關戸正巳曰交替式小公麻と分ツ不長官六分より互減史生ハ一分ふれハ史

生と稱するなりと據ある説ふはとをく不々書生の下小
 次てふれハ幅小をれとも定をうたり又三善清行封事不延喜
 より前諸國不檢非違使あり事見えられ上の吏員七十餘人
 の外に其職も有りたり下野不押領使藤原秀卿あり不就
 本國不も其職の人有りありと思ふ不付り史茂檢をり此
 職ハ陸奥出羽不變ありハ坂東諸國より援と出は不其兵卒と押
 送を京の使あり主典以上の精幹と取り事と見ゆれ是ハ專
 職此人ふうり見ゆ黑河春村曰檢非違使ハ弘仁七年不始り
 見え齊衡二年三月大和國云諸國天安元年八月攝津國云貞觀
 三年十一月武藏國云貞觀九年十二月上總國云ふと史不其國々
 茂舉
 たり

同上 大郡 大領一人 少領一人 主政三人 主帳三人 並職掌
 上郡 大領一人 少領一人 主政二人 主帳二人
 中郡 大領一人 少領一人 主政一人 主帳一人

下郡 大領一人 少領一人 主帳一人

按本國ハ大郡五此員四十人上郡二此員十二人中郡二此員八人
 下郡二此員六人總計六十六人ふり國府不通り百七十七人と
 なる又按孝徳紀二年正月改新詔出てり國造の制を罷らさ各
 國國守郡領の政とる本國ハ其時誰人守介ありりや知るり
 らは風土記慶雲不國司采女朝臣其餘年代を記さ、不國宰當麻
 大夫久米大夫川原宿祢黑麻呂有り國司ハ選叙令不大國介以上
 中國掾以上又主典以上ともありて泛稱ふれを國守とハ定る
 多し續紀天武十二年大伴小吹負卒の下其曾て常陸頭を不と載
 りる國守の史不見る始り文武四年十月百濟王遠寶為常
 陸守不至り守と稱し後百五十年天長三年甘南備高直為常陸
 守不至り其交替史と釋り大氏知るり其三年上總上野と共不
 親王任國となり其以後ハ介を以り一國の長官ともを以り諸
 書不往々介茂常陸守
 と記するものあり

太守

類聚三代格、天長三年九月六日、太政官符、應親王任國守事、上總國常陸國、上野國、右檢中納言從三位兼行左兵衛督清原真人夏野奏、伏稱設置八省、職寮相糅、百官守職、庶務俱成、一事有關、萬事皆緩、今親王任八省卿、此地望素高、不得就職、無知碎務、仍此官事自懈、政迹日蕪、非是庸愚之所致、曰地勢使之然也、凡官人遷代、必署解由、至有欠物、不免償物、居此之費、見其如此、望請點定數國、為親王國、迭任彼國、身留京師、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者、不補他人、其料物者、納置別倉、支無品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春官大夫良岑朝臣安世宣奉勅依奏、件等國守官位卑下、互改定正

四位下官、以為勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、按此小據、先天子御一代、定之、其制、猶當時の制の如、是より親王本國の太守なり

其遷代の次第、天長三年九月、賀陽親王始任太守、帝王編七年正月、

彈正尹葛原親王任之、三代實錄承和元年正月、四品葛井親王任之、續後五

年正月、四品忠良親王任之、同七年正月、四品葛井親王再任、同十一年

正月、一品式部卿葛原親王兼再任、文德實錄嘉祥元年正月、四品時康親王

任之、三代實錄仁壽元年、二品式部卿仲野親王兼任、文德實錄天安元年、四品彈

正尹人康親王兼任、三代實錄貞觀二年正月、彈正尹賀陽親王兼再任、同六

年正月、四品彈正尹惟喬親王任之、同十年正月、四品惟彦親王任之、同

十四年二月四品惟恒親王任之同上十八年二月彈正尹惟彦親王再任

同上元慶四年十一月二品行式部卿時康親王兼再任同上八年三月四品

負固親王任之同上按仁和三年五月為彈正尹太守如故見之此後昌泰元年十月小常陸

太守負數親王扶桑略記按清和皇子皇統紹運錄源氏系圖並云延喜十年六月薨一代要記云十六年五月薨其

餘負真親王日本紀略扶桑略記皇統紹運錄云清和皇子承平二年九月薨元長親王源氏系圖陽成皇子貞元元年

薨九月代明親王花鳥餘情醍醐皇子按日本紀略云承平七年三月薨昭平親王紹運錄村上皇子永觀二年薨髮

る皆常陸太守と稱を此と史傳闕略其補任の年月知る一

ら按日本紀略一代要記並云盛明親王醍醐皇子康保四年親王た寛和二年五月薨とある代算卑分脈に歴上總下野太守と云

ふ事と記より是太守の物不見え終る後興國中護良一代の制寛和ま行ハまハ百五十年小及ハ

親王の王子興良親王小田大寶等の城ふと六歳の間賊軍と禦と給

ひ城陥と吉野小歸らせられ後も猶常陸親王と稱を事往々文

書不見えられも太守と々事異なり

國造

續日本紀神護景雲二年六月戊寅以掌膳常陸國筑波采女從五位下

勲五等壬生宿禰小家主為本國國造此古昔一郡と以て國造なり

一小同一らら常陸國造となり此項ハ食封小國造田とや賜

ハ長官參河守勲四等伊勢朝臣老人掌膳常陸國尚掃從五

位上美濃直玉融掌膳上野國佐位采女外從五位下上野佐位朝臣老

刀自並為本國國造此小家主老刀自二人ハ國名茂舉られ常陸

上野の國造なり。事疑ふ所ふ。老人玉融ハ其姓。本國を知らず。同書紀直摩祖為國造。出雲臣益方為國造。同例之。小家主等三人ハ女子ハ國造と不詳。其例亦多。且此小家主ヲ出處と全ク同。様なき。寶龜二年十二月丙寅。從五位上。因幡國造。淨成女。為因幡國造。ある是。此淨成女。是。先正月。從位五下。不叙。二月。因幡造の姓。賜。十一月。又從五位上。叙。此不至。遂。不真國造。なり。類聚國史。小延曆十五年正月。壬申。正四位上。因幡造。淨成女。卒。元。因幡高草郡之采女也。天皇特加寵愛。何。此人桓武の寵。受。厚恩。不。事。小家主。是。先元年三月。筑波郡人。從五位下。生連。小家主。賜。姓。宿禰。ある。能。似。た。國造。田。の。目。を。逸。史。延。曆。十。二。年。八。月。解。任。舉。て。延。喜。十。四。年。八。月。格。と。引。る。又。續。後。紀。承。和。元。年。十。一。月。不。見。由。本。國。小。此。田。あ。る。事。ハ。後。引。る。と。見。て。知。る。

政事要略延喜十四年八月民部省符小諸國國造田凡四百一十一町の内本國十三町あり。當時小家主ヲ賜ハ。し。の。あ。る。

一。按。此。民。部。省。符。ハ。釐。力。婦。女。田。關。郡。司。職。田。等。と。共。不。返。進。其。地。子。稻。と。以。正。稅。不。混。合。と。抑。國。造。を。神。武。紀。以。首。と。

國造本紀諸國國造。置。始。と。舉。た。亦。成。務。の。御。時。不。定。賜。と。あ。る。之。の。最。多。一。是。と。其。本。紀。不。檢。を。令。諸。國。以。國。郡。立。造。長。と。載。た。三。代。實。錄。貞。觀。三。年。十。一。月。詔。不。孝。德。天。皇。之。世。國。造。之。號。永。從。停。止。と。あ。る。と。此。御。世。不。國。造。ハ。盡。く。廢。と。思。ふ。を。誤。な。り。孝。德。紀。大。化。二。年。正。月。改。新。詔。其。一。曰。罷。在。昔。天。皇。等。所。立。子。代。之。民。處。處。屯。倉。及。別。臣。連。伴。造。國。造。村。首。所。有。之。民。處。處。田。庄。仍。賜。食。封。其。二。曰。其。郡。司。並。取。國。造。性。識。清。廉。堪。時。務。者。為。大。領。少。領。強。幹。聰。敏。工。書。筆。者。為。主。政。主。帳。此。二。條。と。見。ま。ハ。其。一。ハ。國。造。の。領。セ。一。土。地。人。民。ハ。皆。公。不。歸。を。必。故。不。食。封。を。賜。り。其。才。幹。不。者。ハ。多。く。郡。領。主。政。を。任。じ。し。む。國。造。之。盡。く。廢。と。め。不。を。あ。ら。す。を。故。不。了。を。國。造。の。事。孝。德。以。後。史。不。も。往。々。不。見。え。り。但。祭。政。維。一。の。制。を。土。地。人。民。と。失。ひ。後。ハ。專。ら。祭。祀。の。事。以。て。其。職。と。す。様。を。續。紀。大。寶。二。年。の。文。及。出。雲。國。造。の。事。と。以。て。知。ら。ふ。と。此。小。家。主。淨。成。女。等。ハ。其。身。後。庭。不。奉。仕。を。不。を。祭。祀。の。事。ハ。關。ら。ざ。り。一。此。項。道。島。宿。禰。嶋。足。の。陸。奥。大。國。造。と。な。り。寶。龜。中。近。衛。中。將。兼。相。模。守。と。以。て。蝦。夷。叛。亂。の。虛。實。伐。採。延。曆。中。和。氣。朝。臣。清。麻。呂。比。美。作。備。前。國。造。と。な。り。其。高。祖。以下。四。世。ま。て。不。其。國。造。を。贈。ら。れ。皆。大。勲。勞。上。の。特。恩。不。も。尋。常。の。流。と。同。し。う。ら。る。事。想。ふ。へ。記。す。

盛衰

本國の盛時ハ和名鈔の郷名多きを以て上世戸口は多記と推知る
 のと承平五年二月平将門ノ亂起り數戰爭り天慶二年十一月國
 府三百餘家と燒亡とられしを三年二月誅す伏するに至るまで
 五歳の間騷擾當時治平不穏たる民俗は俄に叛逆不遇ひ上下驚
 動をり中も賊衝は當る境域ふれず特は衰弊の端となりし
 や拾芥鈔ノ天慶八年九月大外記三統公忠り當時諸國乃貢の善惡
 と品定り上中下無品産不貢の六等に分ちり本國ハ二總二
 毛と共に第五等の産と定めりハ亂後の凋瘵知るべし西宮記

北山鈔並云應和元年藤原為忠為常陸介請曰如常陸國凋弊已久在
 任四年間不能全濟正稅及調庸率分願二年以上辨濟則准四年皆濟
 例以蒙加階之賞於是公卿議奏辨濟三年已上許賜一階その後長保
 寛弘の頃となりて遂に任限四年に間不能二年は輸をせざる則其
 加階の賞と蒙まると北山鈔又こまを記する幾もふくして平忠常
 又下總小反源賴義本國より兵と進む其亂長元元年より四年と
 及つて其後ハ天下久しく無事なりしを凋弊も稍蘇息なり養
 和と志太義廣の亂あり治承小源賴朝金砂と攻り戰ひまきり何ま
 え旬月小過すして其事定りれば大害も至らざれば建武

正平小及ひてを賊徒猖獗志をく兵革と動し元中小ハ踰年の間
 男體山此兵あり永享より後ハ坂東八國其亂麻の如く郡豪割據す
 小雌雄成争ふ本國小佐竹小田の鉅族ありて各これ小黨屬し結城
 宇都宮千葉岩城伊達那須等の鄰敵と攻撃やるとに民衆の塗炭特
 本國のみふらに天真人と生し否變しと泰となり天正十九年以後
 る四海悉く洪恩小浴し農商富庶各其業小就る其生と樂し事と得
 たり

常陸國郡郷考卷一 終

常陸國郡郷考卷二

新治郡

風土記云古老曰昔美麻貴天皇崇神馭宇之世為平討東夷之荒賊原注俗曰

阿良夫流原注爾斯母乃存遣新治國造祖名曰比奈良珠命此人罷到即穿新井原注今

里隨時致祭。按風土記卷首又此事を載る倭武の時とに其文卷一
 小あり國造本紀云新治國造志賀高穴穗朝御世美都呂岐命兒比奈

羅布命定賜國造これ又成務其水淨流仍以治井因著郡號自爾至今其名

不改原注原注風俗諺曰白遠新治之國。按萬葉集上野國歌志良登保布
 小新田山乃小同一風俗諺とあるハ以下も皆枕辭なり新治井

の事ハ下不出是郡名の義國造の由なり續紀神護景雲元年三月乙亥本

郡大領外從六位上新治直子公獻錢二千貫商布一千段授外從五位

下延曆九年十二月庚戌授本郡大領外正六位上新治直大直外從五位下居官不怠頗著功績故有此授焉とある二人は比奈良珠の後小姓と賜りしが改制の後猶郡領ともふりしふやあむむ

四至 風土記云東那賀郡堺大山按今木葉下大橋等の山南白壁郡後真壁郡西毛野

川後鬼怒河又絹河北下野常陸二國之堺即波太岡按今其名と失ふ笠間山密連續二國を界とる波太岡と稱し又各處にて別名あり是波太岡之又按風土記筑波郡條小逸文の四至は其良白壁郡四字ハ本郡小移し下真伊讚等より其の方位とそへし其餘東筑波郡南毛野河西北新治郡十三字ハ全白壁郡の復出也

和名鈔郷十二
坂門郷 今茨城郡飯岡村坂戸山宇都宮氏族小宅氏壙ある是郷名の遺也

其近地本郷村即坂門本郷から中山信名曰佐竹東義政女法名冷松院天文中書寫より日光三所本地物語とある草紙の末に常州西那珂郡坂戸郷飯岡村と識せり此項までも郷名と傳へあり

按冷松院ハ小宅氏の妻にて天文十七年没其墓今飯岡に存也 一木文書應永卅年足利持氏感状小坂戸合戦

とあるハ戸字代用も古き事也 按此邊中世中郡といふ解後小宅氏未書みて見此を沿習し従ひし元禄十五年西那珂廢し此郷大幡と同一茨城郡小入なり

竹嶋郷 今真壁郡高嶋村是なり信太郡高来郷風土記和名鈔後竹来小作

里茨城郡高原尊卑分脉今竹原と名する類あり此郷五行川と一小流との間小ありて三面尔河ある故小島とあり

沼田郷 今真壁郡野田村是之其隣野殿村ハ旧沼田野あり弘
安勘文小茨城郡沼田に系も今新治郡野田村といふ皆卑濕より
の名あり

伊讚郷 今真壁郡伊佐山村是之東鑑伊佐為宗の地あり弘安作田
勘文小北條伊佐とあり此地と中世伊佐郡又伊佐庄ともいふ

為宗曾孫伊達行朝祖先の舊地あり延元興國の間六年菴
城と勤王と處あり 按新拾遺集に常陸國小侍とある時より伊
藤原朝村にありを思ひ程ふ筑波根

のよそに田井小住駒小見とありを此城に在て讀るあり伊達
系圖云行朝二階堂行朝と同藤原なる故和歌集なる朝村と稱し
て別を 今近地廿五村と土人伊佐庄と云ひ傳るハ古郷中の地か
示に

りーあや

博多郷 今真壁郡羽方村是之博多ハ端瀉あり 按筑前博
多も義同 竹島の北

小在て水流に傍ふ故に名なり 按東鑑治承四年小栗御厨八田館
とあり八田ハ隣地ふれを屬村を
らんと當時已に小栗保中小入て御厨とありしと見えたる黒川
春村曰八田を博多の音便かまを其郷と分ちてやくを唱へしにや

巡廻郷 巡川誤川古川小作齋宮式賀茂あり川廻川曲同續紀

云神護景雲二年八月下總國言天平寶字二年本道問民疾苦使正
六位下藤原朝臣淨辨等具注應疏數筆野川狀申官聽許已訖其後

已經七年得常陸國移曰今被官符方欲掘川尋其水道當經神社加
以百姓住宅所損不少是以具狀申官委莫掘為便頻年洪水衝決

日益若不早為疏鑿渠崩川壅一郡口分二千餘田長為荒廢於是
 仰兩國疏掘自下總國結城郡小塩郷小島村達于常陸國新治郡川
 曲郷受津村一千餘丈其兩國郡界亦以舊川為定不得隨水移改こ
 是川廻川曲同地して其訓ハ和名鈔安房郡河曲音加波和も
 亦証をぐ此郷下真隣毛野河の曲小なる成以て此名と得
 た史小々兩國郡界以舊川為定とあり此時鑿開く地勢變
 き故小郷中の地多く下總に入つてもや將門記小將門傳聞此
 言以承平五年十月廿一日忽向彼國常陸新治郡川曲村とありハ此
 頃已小降して村とありしなる也按其後此郷中と思ハる地
 多く下總小隸云平家物語ハ

島の戰不平頼盛と擊つ本國人土屋小三郎吉安異本泥屋ひち
 屋を作る今下總豊田郡不在て本國と界を村谷村吉安り住所
 ありア永享富有注文下妻庄古澤とあり今豊田郡之其近
 村大園木村を伊達氏筑波郡吉沼大砂等と共小併領とる見ま
 る是も旧本國小隸也也叔續紀を今の絲繰川と掘る事あり按毛
 野川
 又絹川不作る和名鈔下野河内郡衣川兵部式驛馬衣川あねハ毛
 野川の轉き古事之絹川東を本國の川と子飼と云ふ
 も衣川より負たる名と見ゆ小衣川と掘通して子飼入家
 流をまと絲繰とハ名つきし續紀の頃を別小名ハなる也
 子飼渡を將門記兼小塩郷を今其名と失ふ按和名鈔小塩郷りて
 小塩を
 平七年八月不見ゆ小塩郷を今其名と失ふ按和名鈔小塩郷りて
 小塩を
 曾祢かると云或云小塩誤然とも其地小島と距る遠小過と
 今下妻對岸小本郷村ら多く是を小塩と小嶋の本郷とる也
 小島村を現存に置ある事式見ゆまる此頃ハ結城郡と見ゆ
 近村松岡の結城郡あり受津村を今筑波島村小隣にる數須村を
 一を東鑑不見える

て其舊名音小遺まるなり下妻土人の傳説小糸繰川は傍ふ
 比氣村を川を穿ちし時民家と他所小移きし其趾へ後立する
 村なり人家と他所小引た足趾ふる故に比氣と名つて今坂井村
 を近津明神ハ古比氣小ありし社ある代其時坂井村へ移きり
 故小後又比氣も對岸ふる下總柳澤村とて近津の小祠と建
 と村の鎮守とす二村旧一村ふれハこと此説續紀經神社とある
 小も能合とて比氣小鄰まる堀籠村も疏鑿の時よりこの名小似た
 此地将門記堀越渡とある所
 此地の事ハちらふより小嶋より子飼川小至る今一里は近
 き里程ふれハ一千餘丈とある小も稱つて

月波郷 原音都木波今直壁郡筑波村是應永小て藥王院下妻地圖の物

小を筑波島とあり子飼の西岸なる地按古音郡名山名と同一

大幡郷 今茨城郡小幡村是按古茨城郡亦同名の郷あり今此地新治郡小隸一亦小幡と改む

中古中郡小屬文祿西那珂郡小入元祿十五年茨城郡となる

新治郷 今直壁郡古郡村是古郡家の地ハ礎石猶存多く

敗瓦と出せる處あり時小菊花紋の瑞又多く焼米とも出せる

類聚國史弘仁八年十月新治郡災焼不動倉十三宇穀九千九百九

十石とあるものかり此地郡家少郷の事とも兼なり本國小

其例多按出雲風土記楯縫郡楯縫今村中小諸病は驗ある靈泉

とく土人尊崇を清水平地の草野中より湧出する者あり是即
風土記の新治井ある事疑なし開國の名蹟人の知る者よハ歎
す處事ならずや

下真郷 今真壁郡當郷村は後と猶下妻と稱をり全郷の體新治郡
の南より西毛野川小臨と東小大寶湖あり一郡の下方よりつま
ま地なる故の名あり大寶湖ハ風土記筑波郡條云郡西十里在騰波

江原注長二十九百歩廣一十五百歩以下略之萬葉集登筑波山歌新治乃鳥羽淡海とい
る皆此湖の事と騰波鳥羽並小妻も妻の江湖と云ふ義あり
といえり按風土記騰波江條筑波郡の下小在を其上小真壁郡の
四至とも復出したれハ錯簡とせんも不可かきと

西と指さる方位の當まる茂見は葦穂山と新治郡小叙とる類
をりや原略本なきを詳不知るべうらむ但十里ハ何きりて
も廿里の誤く筑波新治の郡家共小大寶湖より三三餘の處か
り若此條と本郡小移をり西茂南に改め十里と廿里小改めさ
れハ方位里程共に稱をり萬葉集ハ草枕客之憂乎名草漏事毛有
武跡筑波嶺雨登而見者尾花落師付之田井雨雁毛寒來喧奴新治
乃鳥海淡海毛秋風雨白波立奴筑波嶺乃吉久乎見者長氣雨念積
來之憂者息沼とありさて師付ハ風土記茨城郡の下小信筑とあ
る地あり筑波の東より今其地新治郡となきを茂見鳥羽湖
をも其近地小索と世人衆訟息まに今能古今の沿革と考り全首
の意味とも悟る一筑波より東北から師付の眺望已小終りて
西顧をり故小新治乃の詞を置たりに其方位茂定めり共
小一方の眺望からん小
新治乃此詞と挿ふ由あり其長二里八町餘二十九百歩廣一里五町餘
一千五百歩 ありも今ハ四邊より新田となりしを纒ふ

其半と存もといふ一此湖白河文書興國藥王院古圖應永小大寶

の名見へるは多賀谷家譜より平沼と稱せり 按今平沼新田ありを此名よ

多賀谷 湖傍の八幡宮と大寶八幡宮といふより湖の名を負り

大寶年中より 東鑑建久三年小下妻宮とある是かろし 藥王院の奉祠と云ふ

應永中此別當より 文書數通あり 按此郷其初大掾維幹二子為賢り後下妻清氏地頭たり其

後又大掾直幹二子下妻四郎悪權守弘幹地頭なりし北條義時と中悪しと建久四年小亡ひ夫より小山族下妻四郎長政地頭小

て其孫修理亮政泰小いたる延元より八幡宮側の城小據り勤王興國小春日中將顯時伐助と興良親王と奉り關宗祐と應援し

と湖の東西小在て賊軍伐捍禦せし事前後六年の艱苦と盡し其四年冬兩城共小陥り皆節に殉へたり後康正中多賀谷氏湖の南

小城城構へ慶長の初きて居りし關原の事定まりて家亡ひたり其城ハ今井上侯治所此處かき又本願寺老臣下問氏系圖

小其先此地の人ありて親鸞本國に在りし時小屬せしといふ又栗山光明寺所藏小下問利之と有文書あり永祿天文頃の物もそや此

地の人小似しと云子四月廿のみにて其年紀詳ならず

巨神郷 今茨城郡大郷戸 按鹿島宮北小神門原あり音郷戸小同大郷戸ハ大神戸かき 稻田等の

地之萬葉仙覺抄 吾岡之於可美爾言而今落歌の注 云常陸風土記曰新治驛家名曰

大神所以然稱者大地多在因名驛家即此地の事なり 按安侯より下野小至る

の驛なりし小や兵部式に此 稻田神社あるも大蛇つりしり祀驛ふるを早く廢せしと見ゆ

まゐるふやあらん 按紀閻龍此言久良於箇美豊後風土記大蛇と大 神といひ續伽婢子といふ俗書小此地ハ大蛇あり

社小つきて出雲の故事小似する傳説あり八瓶嶺の名を笠間時朝の歌のそしり

中世此郷笠間郡小入 笠間家朝申状 文祿より茨城郡

とかれり

三年六月己酉詔鴨大神御子神主玉神列於官社

按實錄誤あり青
山延壽廿八社考

云相傳此社祭賀茂大明神然據崇神紀天皇七年數有災害於是天皇幸神淺茅原卜定於八十萬神適夢神人自稱大物主神曰天皇勿憂國不治若以吾子太田根子命祭我則天下立平天皇乃布告天下求太田根子命既而得之於河内茅渟縣陶村即為神主祭大物主神於御諸山今式曰御子神主則為太田根子命無復可疑焉又出雲風土記意守郡賀茂神戶條云所造天下太神命之御子阿遲須枳高日子命坐葛城賀茂社此神之神戶故云鴨也此御子神高賀茂神戶とも単小賀茂神戶と云ふ此地の賀茂部かるも同一近地也太田村あるハ此社の由りや太田を新編鎌倉志明徳二年足利基氏の文書不見由今犬田小改む此社記棟札等も據ハ寛平九年丁巳始て臨時祭伐修きしとあるく勅使あり康平五年壬寅源頼義陸奥伐討と源時祈誓し治曆四年乙巳八月賽報の造營あり建仁三年詔綸旨の宮たは承承五年始て神官を置く白河鳥羽二帝の綸旨後醍醐天皇元亨三年毎卷尾小御諱を署し給ふ大般若經茂寄ら源と云ふ其餘源頼義北條時頼を寄つりとのふ品々足利春王丸結城菴城の初祈願状かとりて明德三年熊野山願文小連

署せり加茂介宗實嘉吉元年結城落城の首帳加茂部加賀守を此祠官かる一し元來加茂ハ特異の御崇敬小く和名鈔も賀茂鴨部と稱そ系郷諸國小廿所あり百練抄に寛治四年七月廿三日賀茂上下社被奉不輸田六百餘町為御供田又分置御厨於諸國東鑑元暦元年賀茂神領諸國四十一箇所とも見ゆ此地を其御厨かりしとや
神階ハ明應不至して正二位之
按無位ハ仁壽元小皆正六位とあり寛平九ハ大社のみ贈位ありしをまゝとあるのふく下これ小倣え

佐志能神社

今笠間城中小あり三白權現と云ふ

按旧井田郷
續後

紀承和四年三月戊子佐志能神預官社以持有靈驗也

按姓氏錄佐
自努公豊城

入彦命孫大荒田別命之後也佐代公上毛野朝臣同祖豊城入彦命之後也とありて下毛野朝臣とも同族を毛野の近地小豊城入彦命伐や祭りも笠間綱久文明九年佐白三社再造棟札佐白三所大明神とあり後天文永祿の棟札も佐白く三白とを近世改えり三所とも阿武權現曰阿武山小祭まるといふ黒袴權現小聖權現の三神之神名ハ其像ふりて名つけし祭神亦知庵

ら神階ハ上小同一つと一笠間城記ハ阿武山小社ありしと宇都宮氏笠間と領し時今地ハ遷ると云ふ天正十七年笠間網家亡ひ玉生美濃守高宗城代とて城と守り時伐云ふ一庄保私稱郡川

下妻庄 弘安作田勘文下妻庄三百七十町嘉元田文同吉田藥王院大寶八幡別當職徳治三年北條宗宣補任状より應永廿五年に至る數通の讓狀ハ皆下妻庄とあれども誰人の庄園かりしや其傳按筑麓雜記ハ此庄司と飯沼平十郎範遠とつゝ其曾孫左衛門親範の時多賀谷氏の為小亡ふ 税所文書 應永十二年 下妻庄造谷郷今村名 鹿嶋富有注文永享七年 下妻庄内幸井郷今坂

井山穴郷未詳 古澤郷今下總豊田郡 大串郷今村名 黒子郷同上 西廣野今筑波郡西高野村 今賀嶋村今筑波郡今鹿島村 砂塚村今カ筑波郡大砂村小もや 茂見て其地境の大概と知る按庄々崇峻紀小大連守屋の田宅伐四天王寺ハ與と田庄とせ 一事あり西大寺資財帳寶龜中の物亦庄あり

村田庄 東鑑文治四年八條院御領村田庄又後宇多院御領目錄此目錄ハ後二條の項成 安樂壽院領常陸國村田庄九條前關白 同下郷土御門と あり九條土御門二家一領家職と讓り給ひるを基茂安樂壽院へ寄附ありし下郷を東鑑建久三年小村田下庄ある是り小山政光村田と領し二子安房守朝村ハ傳え村田氏となり後三世と安

房守政盛と云ふ南北朝頃の人弘安勘文村田庄二百六十丁嘉

元田文同拾葉抄村田吉間藥師堂ともいふ抄ハ黒子千妙寺亮尊の集かり

今吉田吉間二村伐専村田と稱按土人筑地海老江下川中子大

小今も此七村吉田の鎮守と祭る林陰澤五村と合て村田庄之故

といふ村田氏墟ハ吉間あり水谷家譜小河内村田六郷とい

る々大林以上の六村小して陰澤ハ稍隔りて下方の地かまを下

庄なるべし按文祿小西河内郡と置くも河内の旧稱も因るべし

關庄 後宇多院御領目錄小蓮華心院領常陸國關庄あり按地伐寄

目錄は載るハ寄附の地も領家の得分ありのなるに因ると云

ふ前の村田も同例か是此目錄嘉元四年の院宣ありを禪讓の後

徳治頃小成弘安勘文此地伐西郡南條とありて庄の目小非ハ御

在位故小以まゝ庄ハ立さるゝ之此南條を其嚮より私小關郡と

も稱をねハ下關郡條庄も其名小因まり梅松論建武三年管根

城の恩賞とて此地と與えられ伐見えハ關三十三郷の地盡

く庄とかりハあらは按本國の内吉田郡吉田庄久慈郡久慈

の内小庄の類皆郡と稱する地

附 御領目錄前よ次て大宮院御領之内西御方常陸本庄富小路入

といふ一所と載す今其地詳なるといふ舉て考索と待つ

中郡庄 東鑑文治四年京都よりの扶小蓮花王院領常陸國中郡庄

年貢註文遣之といふ何人領家かりハ弘安作田勘文中郡庄

三百八十二丁六段嘉元田文中郡庄二百八十三丁一段小按其多

ハ詳カ鹿島大官司文書寛中郡庄礒部郷筑波潤朝申状事徳四年常州

中郡庄木所城按拾葉抄城拾葉抄中郡庄門毛佐竹家士證文鈔中

郡庄福田あまのり

附鎌倉大草紙小永享十一年十一月足利持氏の亂小其子春王

九安王丸本國小逃を遂に結城を籠城を事と載つれども筑波

潤朝享徳四年二月の申状の詳かるに如う按此事諸書多く日

山中禪寺知足院と日光山中禪寺と誤混き光の故事とと筑波

別當明玄の後より小田氏の族に但永享記小爰の禪院うこの律寺一夜二夜夜明とあまの春王申状云永享十一年十一月

一日當大御所様成若君様春王於小八幡社頭警固申自其而扇谷

江御出次我等之手計供奉申其時當大御所様御守小八家人又次

郎男參候成氏信濃小走十二年三月四日於常州中郡庄木

所城若君様被起義兵即日梁田出羽三郎景助と賀茂部社其時者

叔父熊野別當朝範以親類等談合先一人則四日馳参々供奉亡父

玄朝者同十三日伯父美濃守定朝同伊勢守持重其外親類等引率

而木所江馳参按木所城今同日小栗江御出令供奉同十八日同國

伊佐御出令供奉同廿一日結城中務大輔氏朝不黙先忠厚恩存弓

箭之頃義奉入我館玄朝親類等御供仕致宿直警固これより以下

筑波氏の功状々小田氏譜不載るる代見るべし

伊佐庄 永享記其目しきとも外に證驗なき濫稱かるに似たり

小栗保 弘安勘文伊勢御厨小栗保三百二十一丁嘉元田文同これ

神鳳鈔常陸國小栗御厨内宮御領上分絹十疋三百二十餘丁とある

る小合とあり按東鑑治承四年十一月源石大将頼朝常陸國府より鎌倉より歸る路小栗十郎重成り小栗御厨八田館より入

とあるハ此地も重成を多氣重幹り四子小栗五郎重家始て此地の地頭より其子重義孫重成之重成十一世彦次郎助重康正中

不至て亡ひより白河文書寶治四年小栗文書嘉吉元年等小栗六十六郷とある

小栗文書北方四十二郷南方廿四郷北方内河下十二郷の目あり其保かるべし按保ハ周禮大司徒小合五家為比

使之相保といふより出たる名小栗拾芥抄に京都の内にて十六町之内有る四保と見ゆ後其名と諸國まで及ぼしたるより東鑑

鎌倉中保保とも見えり鶴岡文書應永卅一年上杉定頼寄進状に常陸國北小栗

御厨ともいふ按今其地は御朱印五十石の神明宮あり又近地金丸村ハ永樂拾貫文深見村ハ壹貫文柴山村も拾貫

文三村合廿一貫文水谷氏の時より檢地と除き貫高にて内宮御領之其初ハ岩洲二頭大夫所務なり代今久保倉大夫ハ所務と

かり其里正ハ伊勢より置く所にて其家小徳永式部少輔永井監物花房志摩守等の證書及久保倉伊織ハ事書一通と藏して神領

の公驗と云其事書小此地ハ頼朝の時那須與一宗高り寄進小其文書あり代慶長九年甲辰火災不遇て焼失と云いふ御厨

の遺たる事ハ失ひし小や

大藏省保 今市毛村之説笠間郡嘉元田文大藏省保六十六丁五段

原十一段は作々今大淵以下の数と以て訂正する内大淵廿六丁四段六十分片庭二十三

丁九段三百丁石井原四丁九段大黒栖十一丁一段小こま大藏省

領と見えり

按弘安勘文誤あり故小く〜に載せす下文笠間郡條參見し〜考ふべし

關郡 東鑑寶治二年關郡二木奈利郷今二木成村 梅松論建武三年管根竹下

合戰の段 常陸關郡と結城祐廣小賜ふとり本郷を郡の南地花田關本

等の地之弘安勘文小西郡南條關百八丁五段三百歩とらる是關

郡かり 按勘文を新治一郡茂西郡東郡中郡と三分一西郡小て又二條に分ち其南方を西郡南條とも關郡とも稱し其北方

茂西郡北條とも伊佐郡とも稱し東郡を笠間郡とも稱し中郡ハ後西那珂郡とも稱し其初を皆新治一郡の内小ての目か

なり此等の郡ハ私稱小して王室の制あるは當時諸國ハ此類

の郡名多〜〜習俗按本國小てを將門記小吉田郡はる茂最古〜とす東鑑佐竹々常陸奥七郡と領云

といふも私稱の郡と數へ〜陸奥五十四郡も此類あり

伊佐郡 伊達系圖常陸入道念西宗村住伊佐郡中村按今中館之其墳堂あり北條

九代記北條左近將監時國六波羅南方も居り茂弘安七年六月關東

小呼下し伊佐郡も流す十月被殺鹿嶋護摩堂書應安伊佐郡平塚郷今村

りふとりりて伊讚郷と本郷と云弘安勘文西郡北條伊佐九十九

丁一段六十歩内以東四十八丁大以西五十一丁半とあり西郡北條とも伊佐郡と

も稱せ〜按勘文殘闕あり嘉元田文もて補へ猶上條と參見をべし

中郡 加茂社文書建仁中郡鴨部郷長福寺鐘識正應二年常陸州中郡長福

寺宗形氏時及藤原氏女の寄附かり白河文書興國中郡城筑波潤朝申状享徳中郡木所

城かど枚舉小違なり保元物語源義朝の屬兵本國の人中郡三郎

らる此地の人なるべし
按東鑑にも中郡氏あり其姓族名稱傳ハ
らす上鐘識宗形氏時其一世なる小似た
り興國中春日顯時城伐抜て其手兵と置く
とあれ中郡氏ハ此時小亡ひたるべし
弘安嘉元の田數ハ庄
の下は擧る

笠間郡 親鸞繪傳笠間郡稻田郷拾林抄郡名笠間
按抄郡名此外數
木ハ茨木の誤よ

て茨城ハ秋津ハ考る所な
故ハ別ハ是伐擧るす 税所所藏應永四年八月笠間孫三郎家

朝目安ハ欲早被退寶戒寺三聚院當知行如元全知行笠間郡十二

郷石井郷半々事
殘半分者
御料所 税所切手員數
應永
配當の 笠間郡十二枚

為
此二通と以て 笠間郡の十二郷なる伐知へし其目ハ吉原福原

稻田赤澤野尻本殿大藏省保大淵黒栖片庭石井原戸藏こま之勘

文田文の二書と参考して其然る伐辨をぐ弘安勘文云東郡吉

原四丁三段小福原十八丁六段小稻田社十七丁小赤澤十四丁一

段半
鹿島
神領 大藏省保五十一丁二段大
按田文ハ校をれを此
數誤あり下小辨す 大淵九

十四丁二段六十歩黒栖四十二丁五段方庭四十七丁三段石井原

七丁八段大藏庄五十一丁二段大
按宇都宮系圖笠間族戸倉三郎
時朝らり戸倉ハ今徳藏とく大

藏庄ハ徳藏の誤なり故其
田數亦省保と重複あり 此十郷あり嘉元田文云東郡三十七

町内福原十八丁六段小稻田八丁六十ト本殿八丁一段半野尻二

丁二段同大藏省保六十六丁十一及内
按十一段
ハ五段誤 大淵廿六丁四段

六十歩片庭廿三丁九及三百ト石井原四丁九及大黒栖十一丁一

反小、按勘文田文の田數小差、こま本殿野尻と合と十二郷之、按あるを今考ふ危うらす

ハ石井市毛、大淵、福田、飯田、徳藏箱田、来栖、本戸、吉原、福田、福原、茂、以、十二郷なりと云ふ其内来栖を黒栖本戸ハ本殿之箱田ハ片庭

方庭之今片庭箱田分村をれと旧一村かりと云ふ飯田を此項赤、澤を併を福田ハ野尻市毛を大藏省保中の地なる事今の田高と

勘文田文校計を、又熊野参詣願文、明徳二年極月初二日判小常陸國笠間、ハ其大氏を知るべし

郡住人福原常陸介朝宗、飯嶋七郎光忠、中子息七郎三郎宗忠、安藤

四郎國守、石平六三郎國安、黒栖加茂介宗實と連署す、按福原今か

關戸、田上の當時の土豪と見ゆ、今十二郷分て廿二村とかれり、按

驚遺跡記小笠間庄あるを伊、佐庄の類もて濫稱かぬへし

子飼河、常陸國誌、蠶養、作、和名、鈔、肥後、菊池、郡子養、飽田郡、蚕養

ハ皆同義、此地を絹川に隣まる故の名を、將門記便以八月

六日、承平圍来於常陸下總之堺子飼之渡也、と見へた、總國風土

記小々幸井川又前井川とあり、按總國風土記筑波郡の四至、西

水守郷條前井川小作、永享富有注文下妻庄幸井郷、た、茂以、

証とそへ、即今坂井村小と地子飼の西岸小在と以、河の名小

負ひたる、ものかり河源兩派あり、西派を下野塩谷郡西高野と起、高根

澤赤羽等と經て、又下田、西安部所、東の間小至り、東派ハ同國芳賀

郡君嶋の邊より發、稍南流、安部所の東より西派と合、本郡

樋口小入り下館の東と過、川中子にいたる、其以上茂五行川又

勤行川とも云ふ、又一派、り芳賀郡の南邊小起、小栗の西と經

て川中子の東より五行川と合し流漸大ふかり始と子飼川と

唱ふ高嶋博多二郷々小栗より支派と五行との間あり 叔南流しと古新治郡沼田月波 真壁

郡大茂界坂井西と過て西より絲繰川を納き今筑波郡高道祖

と東下總岡田郡柳原西の間と流き古河内郡と抱く下總豊田郡

と界し其水海道と西箕輪樛木東との邊ふて屈曲し中世此處ふて絹川と合

流せし事ありと云ふ 河内郡若紫の南より下總相馬郡小入り布河の西ふ

て刀禰川よ入る樋口より紫若芝までの里程十里小及ぶ處し此河

灌溉の為堰と設く開閉は秋冬の間ハ堰茂開きて大船ハ道仙

田小舟ハ河合小至ふ按總國風土記鞋鱗の貢あり今も秋月月鞋茂捕魚事ありとも甚多うらす

附録 貞婦

類聚國史天長二年三月甲子常陸國人女部子氏女叙位二級終身

免其戸田租用旌貞節也子氏女年十五適於同郷人勲七等新治直

單經十八箇年夫死之後常攄墳墓朝夕悲泣雖經多年無變其志按續

紀新治直子公大直二人ハ皆本郡大領今子氏女何郡人なる哉知らざれども單々新治直姓ありと以て之に附きて勲位と賜ひ

一人ハ大少毅の類の人ありし

常陸國郡郷考卷二

終

常陸國郡郷考卷三

真壁郡 風土記作
白壁郡

水戸

宮本元球仲笏著

本郡ハ風土記今本郡名四至のみと存され建置の始知る由ハ
 清寧紀天皇の御名小よりて白髪部と置り後事行きて此郡も
 始其地を見えり行方郡條小新治國小筑波之岳と云ふ事あれハ
 行方の方より筑波と指ん小本郡其山背よりあまを本郡茂しと舉
 げよ小新治國と稱する其始新治と割く一郡とせり疑ひ有
 白髪部姓と真髪部と改めり續紀延暦三年詔小見申後地名と
 も此時真壁と改めり見えり諸國小真壁の地名多し
按風土記小
 據ハ初々白

壁と改め 此國造ハ絶て見る所有 今昔物語康保天延の頃本國相

撲の最手ハ真髮成村及子為成あり長元中ハ源頼信の平忠常と伐

たる時河と涉りて先導したる真髮高文ありハ若や本郡郡司の族

かりしハ

四至 風土記云東筑波郡南毛野河 按蓋方位の大概 西北並新治郡

和名鈔郷名七

神代郷 今龜熊村是之初神稻代かり 茂地名二字の制より稲字

茂省して訓ハ其義と遺をとり見由和名鈔石見邑知郡淡路三原

郡にも神稻と久萬之呂と訓す是ハ代を省して訓ハ遺より 國名

上下毛野ハ毛茂省して訓ハ遺を原ハ同 神の龜ハ轉よりハ天

訓と文字と茂合せて地名の義知る處又ハ 武紀備後龜石郡と桓武紀神石小作里和名鈔も神石訓加女志之

萬葉東歌小神とつめをよる 本國鹿嶋郡神谷戸茂畑田應永文書龜谷田小作里中郡池龜ハ今ハ

と呼ふ 稻と久萬と稱をるハ和名鈔稻米和名久萬之禰離騷經注

云稻精米所享神也神代卷保食神の身より生きたる粟稻と取持

大神小奉祀る人茂天熊人と云ふ持統紀奉奠と久麻たてまつ

とつめを倭姫世記彼稻拔穗令拔而皇太神宮御前懸久真尔懸奉

姓氏錄國栖條允恭天皇御世ハ 巳未年中七節進御誓仕奉神熊至

今不絶 按此神熊を神態の誤ハ似たれと元神 新猿樂記熊米と作

るふともあり淡路神稻郷も文永の地頭注文小々神代郷小作ま

能登國誌羽咋郡神代村訓加具美神代神社あり越後神代村も同訓皆加美具萬の約々越中神代村をこうしんと呼ぶ筑後御

井郡神代訓又萬之員和名鋌刻本神氏小誤家長崎小熊代氏なり下總海上郡神代郷々今香取郡小入て上代郷と云ふ黒川春村曰

今内侍所の供米成おくはといふとをけと猿樂目近大名といふ狂言にもおくまは詞あり又陰徳太平記小嚴鳥の御久米巻敷と

何るも是なり按畢竟く此地弘安作田勘文小々亀隈小作る關係

圖小族神代氏ありと永慶軍記小真壁臣龜熊伊勢守なり真壁記小

作皆此地の人あり長岡文書建武二年龜隈彦次郎入道關所

名小大國玉神社と接ぎ所をまハ其神稻と殖地小按上總

社の近地小も上代村なり是も神代小て其神社の供米成出さる所と云ふ

真壁郷 今古城村是之東小葦穂加波等の連山抱擁一郡の中間

不在て形勝の地なり郡家とて郷とも兼たる々出雲風土記郡家

據此とあるの例なり此地中世大探重幹四子真壁六郎長幹居城

遷其西隣町屋村と今專真壁と稱し商賈湊集の地なり

長貫郷 今古郷村是かる處一近く三郷と云ふ所あり徳永村

一内村をとしといふ神代長貫新治の三郷出合ひたる地故の名

と見えたり

伴部郷 今茨城郡友部村是之古事記景行卷此之御世定膳之大伴

一奉國の内此地名三所あり其一々風土記又慈郡初大伴部あり

ふりう今其地詳らる其一ハ多珂郡小あり

一茂淳和天皇の御諱と避く改めしと見ゆ續紀諸國皆然也四天王寺御朱

印縁起小相模足上郡大伴郷々和名鈿伴部郷なるの類其証あり續紀延暦廿一年九月本國人大

伴繼守あるハ此地の人や按法隆寺古茵の裡小天平勝寶八年常陸國信太郡中家郷戸主大伴部羊

調布進物とあるを它郡より大伴姓あり

大苑郷 今大曾根村小て弘安勘文已大曾根按下總海上郡地園村土人へひそ

総と呼ふ苑々黒川春村曰古本新撰字鏡云埔壘磬三同胡甬反又

碓宇曾祢又云境境磬三同口交反平地土石交堅也曾祢也とあり

て埔字の義とさき大曾根を石根の上略ふと平地土石交堅の由

なり余按後世字書は埔地不平也と注し播磨曾祢の松本國行方

郡曾祢驛及此地とも兼た氣へ一甬甬互用ハ國書ふ多きならん

と地不平との義とも兼た氣へ一甬甬互用ハ國書ふ多きならん

之和名鈿土佐長岡郡大曾訓於保曾祢とあり氣茂其國今大埔字茂

用ゆといふ下總結城郡小埔も字鏡小樞を小曾祢をさきとる續紀

小塩郷と同地不似たれと其誤向まとも辨しつゝ

大村郷 今大林村是おん按村ハ林の誤ら又ハ後世村名の便

小もあれ古本郡の南地小て一郷と置え處此一一字茂増するよてをかさう何ま

さの所ふる茂以て定て此地とハ云ふなり

伊讚郷 今伊佐佐村是おん弘安勘文已おん伊佐佐とあり夫木集おん

ささ川ともあるハ此地の川ありて廻國雜記いささの橋も其川

筑波川ともいふま新治郡伊讚と同字もて唱え異おるハ二地

の遠うらぬ處を茂以て別てる為の後世のささか原べ按い

川と隔く對岸は西郷谷村あり此郷の西ふる故の名と見へつ

伊讚博多川廻新治月波下真の八郷と合して本郡の地なるを

神名帳真壁郡一座小

大國玉神社 今大國玉村小在按神代郷續後紀承和四年三月戊

子、大國玉神預官社、以持有靈驗也、十二年七月辛未、授無位大國玉

神從五位下社傳大國主命及活玉依媛茂祭祭と云ふ今八幡宮と

冷小して早歳其井と深をれ必應驗なりと云ふ按武山城久

世郡水主座山背大國魂神社伊勢度會郡大國玉止賣神社尾張中

嶋郡尾張大國靈神社對馬上縣郡島大國魂神社上野佐位郡

大國神社と上野神名帳小大國玉大明神と記を此外大倭神

社を大和國魂神主玉神社ハ難波主國魂神を主神代紀天之國魂

命何古語拾遺生嶋是大八洲之靈なりと云ふ後ハ大國玉の稱の

みあて必大元年遲神神階ハ從一位命大已貴命建御名弘安勘文

大國玉社三十丁九段大とあるを當時の神田かきしあや

式外贈位神祠

郷造神 三代實錄仁和二年六月廿八日丙子授正六位上郷造神從

五位下とあるを倉持村の神祠かきと云ふ社記毗那良珠命武甕

方命事代主命五神茂祭るといふ按倉持村同訓之其名あて考

るに姓氏錄云車持公上野君同祖豐城入彦八世孫射狹君之後也

此射狹君即伊讚小て本郡及新治とも小此人治め故小射狹君

と稱し二郷の名茂負うる程の功業ありし茂以て其子孫車持公

此地小居て射狹君と郷造神と祭る小てかさう本郡ハ本新

治茂割る地と見ゆまを毗那良珠命と祭れる由あれとも其他

神と祭里しハ何如なる故小や又按神階ハ天下諸神仁壽元年ま

て無位かるる皆正六位上と授けられ貞觀元年又各一階茂叙す

田知家小田持家等寄つりと云ふ物と藏せる代見まハ其先よ
世の崇奉つりし事知らる按郷造を國造冊造の
造と同義なるを

三枝祇神 三代實錄貞觀十七年十二月廿七日丁丑授正六位上三

枝祇神從五位下とあるハ加波山中宮より其棟札ハ三枝神社と

識しつりと云ふ三枝祇と社傳といかつとを訓むと也按加波山
ハ本郡長

岡小幡の東ハありて古茨城郡と本郡との界あり其高筑波小亞
江葦穂小勝を本宮中宮下宮と云々三社あり御朱印地百石と長
岡村圓鏡院正幢院分領一中宮本宮と別當云々下宮ハ今新治郡大
塚村ハ別當あれとも御朱印地の配分ハなりと云々
枝部連を額田部湯坐連同祖天津彦根命十四世孫建巳呂命之後
也とありて風土記ハ多祁許呂命の後を云々と載た
れ此祠ハ茨城國造ハ其境界なる高山ハ其祖先代祭儀ハ云々
爲此山今新治郡よりハ大増大塚裡内三村の西ハ連亘と云り神

階ハ是も貞觀元年一階伐加ハハハ漏たりと見えたり伊
能頼則曰三祠とありハ三枝の名より附會と云る也

庄山岡川

真壁庄 鹿嶋大宮司文書正和真壁庄小幡郷実戸一木文書永享真壁庄

飯塚かゝりまとも何人の庄園なるも其立たる年紀土地の廣狹
等も皆知るべしと云

石田庄 今土人あど石田と稱する地本郷かゝり一將門記ハ將門

驅役丈部子春元ハ姻家ありて石田庄ハ往來と云載されハ
本國の庄もハ最舊ハ和漢合運圖ハ大掾國香承平五年二月將

門ハ戦負て石田館より自殺と云載るも即此地なる也按合運
元將門記

不採意なるを然とも今將門記
首頁殘闕して其事却て合運に存云
將門記其時の文不以其四日
承平五年始自野本石田大串取木等之宅迄至與力人人小宅皆悉燒

巡關又筑波真壁新治三箇郡伴類之舍宅五百餘家如員燒掃とあ

按石田庄其郡名なり且古新治郡沼田の邊亦石田と云今本
郡と云ふ所のを將門より下總石井營より便近の地あて一日中
小三郡と燒くを其地犬牙相錯をふらうれを能く因て本
郡と定めたり國香は孫維幹に至りて水守より多氣は遷るも皆
其近地を大串ハ古新治郡と云今其村あり野本を蓋今本郡の
南邊か派向中寺の三上野是なる所獨取木を知るべし

此庄何世誰人の地ありん後田中庄蔓延して併吞せられし
や今土人田中庄かましと云ふ

葦穗山

風土記

新治郡
條末

云自郡以東五十里在笠間村越通道路稱葦

穗山古老曰古有山賊名稱油置賣命今社社中在石屋歌曰許智多

難波乎

婆頭勢夜麻能伊波歸再母為互許母良奈半奈古非叙和支母原云
以下略之○按此歌萬葉集事之有者小泊瀬山乃石城再母隱者共
爾莫思吾背は作里陸奥淺香山歌の前小載たり色川三中因て東
歌なるを云ふ然らば小泊瀬ハ又此山の一名称か解者萬葉
の歌代以て大和國と云ふ
其名高きより誤らるべし

又萬葉常陸歌筑波補爾曾我比爾

美由流安之保夜麻安志可流登我毛左禰見延奈久爾その外建保

百首小も此山浅くめは歌多し此山筑波の北背小接續して高き

加波小垂く加波ハ又此山の北に連なりて二山本郡と古茨城郡

と浅界より古新治郡家より笠間を往くハ此山と踰ると見ゆ古

十里と稱する當まり今ハ足尾山は作る

今ハ足尾山は作る

枳波都久岡 萬葉集 未勅國 雜歌 云伎波都久乃乎加能久君美良和禮都

賣村故爾毛乃多奈布西奈等郡麻佐補仙覺鈔小風土記據此

岡本郡小川と云ふされと原文とも載され其處知らる按本

郡東邊の山岡起 伏の所小在

伊佐佐川 此川源古新治郡山口村より發し磯部村に至りて櫻

川と云ふ 後撰集常陸國小櫻川といふ川のありきさして紀貫之 常より春へよかきく櫻川なまの花を間をくは

らちとあるを此地よりいふ又廻國雜記櫻川と渡りけりハ紅 葉うつらひて波は映しけり見ゆ道興准后秋の色小うつらひ

こても櫻川紅葉小波の花とそつづきあるを貫之の歌小とて ぬるを更かりたりう小本郡に至りて此川渡り給ひなり

南流して古郡の東小いたる是より東流して古真壁郡に入りて神

代 西 真壁 東 浅歴て伊讚の西と流き伊佐佐川と稱す 田國雜記小

ごめりも此 地の橋なり 叔正東流して筑波郡小入り其南北條と界し筑波山

より小流數條と受ると以て筑波川 按關東古戰錄又 筑輪川といふ と呼ぶ方

穂栗原二郷の北と過で 今ハ南條大底 新治郡小入り 古河内郡大村の北小て古

茨城郡と界し 今ハ南北とも 新治郡なり 土浦城下小て流海小歸ふ 其城下の 橋云ふ此下流ハ旧市中小ありて浅便利の為田中と

疏鑿して流海と達をといふ錢龜ハ東海の官道也

附録

文德實錄云齊衡三年十二月廿日真壁郡言生連理樹二也一郡山

裡兩處森然分根合幹異體同枝或相連其間一丈餘尺或交柯之上

常陸志 卷三 真壁 八 三香土藏

更挺好姿

是歲美作國苦田郡亦獻白鹿

明年二月改元天安免本郡今年庸

免苦田郡調

所獲祥木吏民二人亦量與爵賞

又復天下今年半徭按今其樹の所絶と知る處うらふ

常陸國郡郷考卷三

終

常陸國郡郷考卷四

筑波郡

按和名鈔周防佐波郡波音如馬

水戸

宮本元球仲笏著

風土記云

古老曰筑波之縣古謂紀國

按南海道なると同く木の義小や總國風土記本郡松杉柏樟の

貢り美萬貴天皇

崇神

之世遣采女臣友屬

按僚屬の義

筑篁命於紀國之國造

時筑篁命曰欲令身名著國者而後世流傳即改本號更稱筑波

原注風俗諺曰

握飯筑波之國按色川三中曰新撰字鏡篁丁丹及笏とらまを筑篁

ハこの義何き小あれ古の附會かる處

是郡名の由及國造の始

景行紀菟玖波小作國造本紀云筑波國造志賀高穴穗朝

成以忍凝務

見命孫阿閉色命定賜國造これ崇神の後二百餘年小あまハ國造も

一姓小々あらふ 按筑波私記云東山釋迦院
々國造の宅趾なりと云ふ 續紀神護景雲二年六月

掌膳筑波采女壬生宿禰小家主為本國國造とあるを常陸國造と云

まゝをまゝハ別小出たり

四至 風土記云東茨城郡南河内郡西毛野河北筑波岳 按總國風土
記本郡の四

至東限金井岡ハ今新治郡金田岡の二村なり一ハ二村を同一村

かりと云ふ西限幸田川田ハ井誤其水守郷小前井とある同一今

坂井もて永享福有注文より幸井と作る子飼川の事なり南限豊

浦寄も子飼もて川と隔て下總豊田郡なまゝハ豊浦の名もたりし

和名鈔郷九 かる一ハ北限大林ハ
筑波山麓の林茂りゆ

大貫郷 今大貫村是之弘安勘文北條の内小あり 按本郡ハ筑波川
より南條北條の

界茂成をり今北條村たるを其名
残もて旧名多氣と稱を一地なり

筑波郷 今神郡村是かる處一鶴岡 應永廿
四年 文書小筑波北條郡家郷

とあるを此地之式部式倭姫世紀三代格等小諸國神郡の目あり

伊勢國飯高度會多氣安房國安房下總國香取常
陸國鹿島出雲國意宇紀伊國名草筑前國宗像 本郷も筑波神社

の神田あるより私小神郡とハ稱をふらん弘安勘文筑波社五

十六丁六十歩と見え多り治承中八田知家本郡三村郷に居り其

八子法眼明玄筑波別當にて子孫天正の末まで相續せり其族は

筑波越後守伊勢守かと云ふも有り 按此地故城趾を別當
又ハ其族の居りや 知家子

孫常陸守護とて郡司ハ更なり筑波社の事までとも兼行ひりと

見えく總社文保三年請文注文よ筑波社三村郷地頭小田常陸前
司請文一通とあり是村名の由く

水守郷 今新治郡水守村是之中世或三守尊卑又水漏大探系圖よ作る

將門記小も水守營とある所なり國香う宅石田後平貞盛の子維

幹居る從五位下小叙一水守大夫と稱ふ後多氣今北條村よ徒多氣

大夫と云ふ嫡子為幹多氣と繼子二子為賢水守氏たり分脈系圖

物今古墟猶存す此郷南條の首く按總國風土記本郷の下前井川

飼川小瀨セ分脈系圖宇治拾遺

三村郷 今小田村是之此地小八田知家り香火の地三村山極樂寺

清凉院あり其地中三村山の字ある府中總社文書文保三村郷地頭

小田常陸前司とあり櫻雲記高師冬六月十五日興國二年小田近邊三

村山よ陣すといふを白河文書北畠准后の手簡小々取陣於當城

小後高山と書給ひ僧忍性行狀小建長四年極月四日到三村と

ふ茂元享釋書如常州宅清凉院と載り此地治承よ八田知家

八田朝綱子地頭とて子知重より後ハ小田氏と稱と見えハ郷

ハ三村よて旧より小田と云ふ地からん古三村部と置る所

三代格弘仁十二年本郡人三村部黒刀自り按續紀新治郡人三

より今の新治郡三村と云ふ村部綿女其郡小出此郷を北條之按今北條三町此郷

多氣山々松輩と産する故の名なりといふ總國風土記三村郷の貢物松輩は亦一証なり和名鈔菌茸和多介とあはれハ其説據原屬一伊勢多氣郡多氣郷音多介とありて郡名の下は竹とあり倭姫世紀小竹郡神名帳は竹神社ふとあり是ハ竹の義を見えたる

栗原郷 今新治郡栗原村是之南條なり 按寶永地圖は猶本郡とせしむ故常不習一誤なる也

知る

諸蒲郷 諸渚誤今菅間村是之萬葉渚座船之と云ふを舟の訓

伊呂波字類鈔渚洲渚也と注云筑波川の南南條とて子飼川まで達する地と見えたり

清水郷 今新治郡稻吉村の内清水と云ふ所あり舊別は一村あり

いふ是郷名の遺小似たり其地清水院と稱する密寺境内に辨財天祠ありて祠後清泉湧出を事四時たえに炎旱の時ハ道賜沢潤を小豆一此泉も因多名と得るは一是北條極東北の郷あり

佐野郷 今永井村に隣する本郷村是を分一北條の内之 按永享七年富

有注文巴小山庄内本郷とある古き稱なり此郷名を遠江佐野郡同音さやうと爲茨城郡佐谷と近地あり混なるは以て本郷とを唱えしなる也或云今新治郡上中下佐谷三村に純古筑波郡佐野郷なりと然きとも弘安勘文在縣名の内恒安佐谷廿七丁とありて大掾教幹の弟佐谷次郎左衛門實幹其地頭おれを佐谷の古茨城郡なりと事疑あり

方穂郷 今新治郡玉取村其郷なりて地の形勝と見えハ是即本郷

なる事三村郷の類近世も侯伯治所の地たると見る白河文書興國二年北畠准

後の書小師冬寄来之後度度被仰了去十四日六月打入當國方穗庄

同十五日取陳於當城田後高山了とある伐別府尾張太郎幸實

目安小々曆應四年六月十六日興國二年馳向于小田寶篋塔峰致合

戰按小田寶篋山石造の寶篋印塔あり蓋小田氏の物かり追落御敵即於西尾崎取陣警固仕

訖七月八日於玉取警固中略同十二月玉取御發向關城之時御共仕

畢とあり玉取の師冬本營の地此地より出づ時々諸城と攻ふり是南北朝より同時の事

と記とるよりして二書と比較をれば方穗の玉取なる伐知倉此

地弘安勘文小南條方穗庄とあり按東鑑建久元年片穗平五片穗平六あり方穗小同て此地の人

ウ又北畠分限帳小方穗刑部少輔あり思ふに其先此地の人より准后小田關城小後い竟小衛送して伊勢小留まりしもの後と見えたり

右九郷北條五郷の内清水南條四郷の内栗原方穗水守合々四郷今

新治郡小入北條大貫筑波三村佐野南條渚蒲南條の五郷小古河内郡島名

八部真幡の三郷と詳ならざる一郷河内と伐加え今の本郡とせ

蓋文祿檢地の變革かり

神名帳筑波郡二座大一座小一座

筑波山神社名神一大一小。按日本紀略小據る不名神大ハ男神なり男神社ハ西峯在り女

神社々東峰在り風土記云古老曰昔祖神尊巡行諸神之處到駿

河國福慈岳卒遇日暮請欲寓宿此時富慈神答曰新粟初嘗家内諱

忌今日之間冀許不堪於是祖神尊恨泣罵告曰即汝親何不欲宿汝所居山生涯之極冬夏雪霜冷寒重襲人民不登飲食勿奠者更登疏波岳亦請容止此時筑波神答曰今夜雖新粟嘗不敢奉尊旨爰設飲食敬拜祇承於是祖神尊歡然謔曰愛乎我胤巍哉神宮天地竝齊日月共同人民集賀飲食富豐代代無絕日日彌榮千秋萬歲遊樂不窮者是以福慈岳常雪不得登臨其筑波岳往來歌舞飲喫至于今不絕

也原云以下畧之○按榮落勅恐崇誤此歌皇朝韻語の祖之又按社祭神何神たる詳ならず總國風土記木花開耶姬命と今伊弉諾伊弉冉二尊なりと云ふとも風土記不據まを信し

男神 類聚國史又紀 弘仁十四年正月廿一日丁巳從五位下筑波

山神為官社以靈驗頻著文德實錄天安二年五月壬戌筑波山神二

柱授從四位按下は據ハ此時從四位上三代實錄貞觀十二年八月廿八日戊申

授從四位上筑波男神正四位下十三年二月廿六日壬寅授正四位

下筑波男神從三位日本紀略寬平九年十二月三日甲辰奉授筑波

男神位一階正三位なり按是より後天慶三年永保元年永治元年治承四年と四度贈位して正一位小叙とらるる

女神 續後紀承和九年十月壬戌授無位筑波女大神從五位下文

德實錄天安二年五月壬戌筑波山神二柱授從四位按從四位下三代實

錄貞觀十二年八月廿八日戊申授從四位下筑波女神從四位上十

六年十一月廿六日辛寅授從四位下筑波女神從四位上按十二年十六年前

後階とも同一と云ハ十六年を誤複と云ハ後寛平九年ハ大社の
之贈位あり女神を與ららば復り位階代誤り云ハ詳からざるを
位階推算す
屋ららば

庄保山

田中庄 今新治郡田中村庄名の本之其村山王祠天正十八年五月

淺野彈正少弼木村常陸介の制札小禁制常陸國田中三拾參郷之

本郷と題と云此庄東鑑文治四年三月京都の事書に常陸國村田

田中下村等庄事或安樂壽院領云或八條院御領云年貢可沙汰何

御倉候哉とあり六月京都の御答とて皆八條院御領なる代知る

是平氏西奔の故小領
家知まこりしを 後八田知家り七子田中九郎左衛門尉知氏

其近地なるを以て地頭と云五世孫三郎隆繼小至り高師直り

黨よて亡ふ小田系圖按院雜色田中系圖小隆繼子隱岐守繼政院
北面より子孫雜色と云はるも御領と地頭と云ふ

由 其内四分一を元弘の頃北條左近將監時興入道惠性
高時の弟地頭なり

一亡ひ一後貞和二年佐竹貞義地となす清音寺
文書子義篤孫義

宣代々傳えり佐竹
讓狀山王祠應永卅三年五月文書小八梵方正長

元年十二月ハ理兼と云るを共小寄進状かまを足利の時此地

頭と見ゆれと其姓名詳ふる其後又小田氏兼併と見え明

應五年九月成治永祿三年八月氏治其餘小田氏家臣の状あり弘

安勘文田中庄五百丁嘉元田文々下妻庄の次は同加納田中庄と

擧はりは其庄蔓延して下妻庄小通里一故り今も信太郡楯縫神

社波多野刑部少輔泰治宗信太郡太谷城主小天文廿五年寄進せ

る大般若經は田中庄栗原郷長福寺常住と識とる此寺の旧物

西ハ下妻東ハ栗原もくも廣こりしを見申岩松文書至徳三年四

方穂庄 弘安作田勘文南條方穂庄九十一町一段嘉元田文南條方

穂庄六十四丁四段半櫻雲記興國二年方穂庄ともありて郷名と以て

庄とせり何世誰人の領しもん後田中小併とられなるべし

山之庄 税所切手員數筑波北條七通山庄一通鹿島永享富有注文

山庄内本郷善鏡入道完戸備前守知行同所郷法性入道完戸中務

丞知行善鏡法性々々園部状天山之庄松岳寺寺今新治郡戸

て其庄名あきとも弘安嘉元小見えさるハ其後の新立もや文祿

地圖今泉小山寄澤邊九村山庄と云ふ

熊野保 弘安勘文筑波北條酒依三十三丁五段大熊野保あり按酒依

壁郡酒 筑波潤朝申状の叔父熊野別當朝範寄村所帯小あり今真

率分保 同上筑波北條大澤三十七丁率分保嘉元田文々四段小多

寄村

率分保

同上筑波北條大澤三十七丁

率分保

嘉元田文々四段小多

寄村

率分保

同上筑波北條大澤三十七丁

率分保

按大澤ハ今小澤村之小田族北條筑前守道知、後大澤氏あるを此地と稱す、率分堂領と見え、

筑波山 風土記云、夫筑波岳、高秀干雲、最頂西峰崢嶸、謂之雄神、不令

登臨、但東峰四方盤石、昇降决屹、按碑謂之雌神、其側流泉、冬夏不絶、

是みふの川此源ふて小流、自阪以東諸國男女、春花開時、秋葉黃節、

相携駢闐、飲食齋齋、騎步登臨、遊樂栖遲、其唱曰、都久波阿波牟等伊比志古

波、多賀已等岐氣波、加彌丘阿須波氣牟也、都久波丘乃、伊呂伊呂甫、

伊保利兵都麻奈志甫、和我丘牟欲呂波波、夜母阿氣奴賀母、詠歌

甚多、不勝載重、俗諺曰、筑波之會、不得娉聘、財者兒女不為矣、口中萬葉高橋蟲麻呂

乃吉田令世歌々色川三中、補ひ、小從ふ兒女、の句意詳から、益耀歌會の事、付たる文あり

登筑波山為耀歌會、自作歌、原注耀歌者、東俗曰、加賀比、其事ハ歌中

又鹿島郡條と此山本郡の北、小聳え、真壁郡と背あり、古茨城郡と

東と、三郡の界、小盤踞して、頂は雙峰あり、西戎男體雄神、東と女

體女神、と云ふ、二峯と面背、糸遠望を、れ々殆と馬耳の雙尖、成

より、其間相距、一里、何と山麓の東、山口村あるを、古の正路か

らべ、今神郡の方より上る頂まで、ハ二里之、十八町上、筑波町山脉

東、小走、小田山と、かり北は連亘、將門記とを、をを、を、を、

里起伏して、葦穂加波の諸山と、あり中郡の南界、小赴く、萬葉、此

山の歌多け、まとも丹比真人國人の歌、山の神靈より、登覽の勝ま

と成盡り其後と有りて又葉山志げ山々とも詠きしを此山頂
より麓に至り松樅叢生高山よハ其類少ふる成以てこのハ稱
きふる也

阿自久麻山 萬葉集未勅 云安杼毛何敝可阿自久麻夜未乃由豆流波

乃布敷麻留等時伎用可是布可受可母この山名所寄本國の山ふ

りといふハ雲御鈔よ中山信名曰小田治久康永二年佐賀美濃守

小與る書云為加恩地阿地熊平澤可致成敗云と何る平澤ハ筑波

山麓の村をまハ阿地熊即阿自久麻とて其地も山よ傍たる所を
る故尔山とも呼へりふをあらわし今ハ其地名なり

常陸國郡郷考卷四 終

